

俳句雑誌

令和二年十二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十三巻第十二号

# 水 明

2020 12月号



《今月のかな女》

氷叩きて柄杓ぬきたる旦かな

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

厠に置かれた手水鉢に入れてある柄杓である。年の瀬の某日夜明け刻、手水をおおうとしたら、厚い氷が張っていた。

氷を叩き割って柄杓を取り出すという、まことに臨場感に富んだ俳句で、当時の寒さが如何ばかりであったかが伝わってくる。筆者の子供の頃も、今に比べるとうかなり寒さが厳しかったが、本句が詠まれた当時は、もっと寒かったのかもしれない。

(鬼之介・註)

# 水 明

第1083号

— 華の一句 —

ライオンの声ぞ悲しき夜の秋

日 高 道 を

夜間に、動物園から聞こえてくるライオンの声。百獣の王・ライオンの声は、絶大な貫禄があり、実に恐ろしい。それを、「悲しき」と捉えたところに、作者のライオンへの思いが込められている。寝苦しい晩夏の夜。ライオンは何を訴えているのだろうか。

(鬼之介・推薦)

# 水 明

令和 2 年  
12 月号

今月のかな女

華の一句

黒門町 (作品)

秋の七草 (近詠)

不意に (近詠)

雪 景 雪欄作家近詠鑑賞

硯 箱 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

境 延昭 椎野美代子  
島津 初花 ほか

季音「月」 (同人作品)

十倉和子 小倉倭子  
袖木治子 ほか

季音「花」 (同人作品)

松井由紀子 井上玲子  
近藤徹平 ほか

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

現代俳句鑑賞

網野月を



集 特 家 作  
 集 水 尾 矢

俳句と私	32
自選五十句	34
アイ子と水尾の海	38
ぼうたん色に	40
水尾の一句	42
矢作水尾	32
山中順子	38
境 延昭	40

水 明 集

原田秀子 日高道を  
 野田静香 ほか

水 明 集 作 品 評

水 琴 窟 (夏季競詠・十月号鑑賞)

山本鬼之介

池田雅夫

俳誌望見

梅澤佐江

句集喝采

近藤 徹平

水明の記事掲載他誌転載

第四回水明塾

保坂翔太

水明例会報・各地句会報

新春俳句大会のお知らせ・新珠賞作品募集

風声・水明発展基金御礼

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

---

---

# 黒門町

山本鬼之介

駅裏や「文化通り」の冬灯

目明しの伝七の町枯柳

せつせつと「カチューシャの歌」冬のぼら

---

華道部の生徒の荷物初しぐれ  
部屋占むる鉄道模型暮早し  
はせを忌や少しまじめに俳句せむ  
実千両これぞ旧家の門構へ  
この道を行けば逢へるか冬木立

# 秋の七草

網野月を

山萩の名残とどめて日の溜まり  
五弁なる桔梗の正義情を受く  
葛の花自縛の夢に嵐かな  
藤袴そろそろ尋ねる人もなし  
妻愛憎風には揺るる女郎花  
フエンシングの剣の揺らぎや花芒  
風なくてそは撫子のらしさかな

一九八六年六月四日にドイツに留学した。月末に二十六歳になる私には待望の留学であった。その後、試行錯誤の連続であったが、今思うと楽しくて意義深い体験であった。当時付き合っていた彼女が秋に留学先に押し掛けてきた。休暇を取って渡独して来たのだ。二人は一緒にドイツ国内を旅行した。ハイデルベルク、ノイシュヴァンシュタイン城、ミュンヘンと廻った。それから三十余年経つ。いま、彼女は妻として我が家にいる。



# 不意に

石井喜恵

葛の花風を踏み行く山路かな  
迂回路の赤き矢印曼珠沙華  
畦づたひ不意の高さに蟋蟀とぶ  
水澄みて音なく亀のもぐりけり  
萩真白風の纏れしひとところ  
その事には触れず二人の夕花野  
暮れ際を熾のごとくに初紅葉

今年も余すところ僅か。依然としてコロナウイルス感染の終息時期の予測は出来ない。妹の入院見舞にも行く事ができず、娘や、息子、孫達にも年の始めに会ったきりだ。などと家の中で塞ぎ込んでいても仕方無い。

先ずは外に出てみる。子供たちが幼い頃、兜虫や鍬形虫を捕った大木は、ことごとく伐採されて、マンシヨンや住宅が建ち並んでいる。久方振りの近隣への散策だったが、すっかり様変わりしていた。

見上げた秋の空は高く大らかで、木犀の香を運ぶ夕風はどこまでも心地良かった。

# 雪景

季音雪欄作家近詠鑑賞

町野広子

◇近辺散策（八・九月号）

鈴木康世

◇梅雨の晴（八・九月号）

石山かつ子

黎明の空紫陽花は彩深む  
鴨足草群れ咲き抜け路明るくす  
戩草や恍惚顔した陶狸

清々しい夜明け。人の流れもなく辺りは薄紫に包まれる。作者はそんな朝の散策に出かける「黎明」が、殊更清く美しく紫陽花の紫と重なり心奪われる。又、路地の日陰には鴨足草の白い花が咲き乱れている。小さな花も集まれば辺りは明るくなる。三句目の「戩草」が筆者には解説出来ず教わった茎や葉の独得の臭気とは別に、真白の十字の花は可憐で美しく、筆者の近辺にはこの花のファンも多い。玄關脇に鎮座する陶狸の恍惚顔。どくだみとの兼合いが絶妙である。

夏薊の棘に触れたる咎は何  
忍冬の花散る白き刻の失せ

葉も茎も全身棘だらけの薊。懐しさと珍らしさに近寄った途端、その棘に触れてしまった。花にも私にも罪はないはずと作者の自問が聞こえて来る。常緑蔓性のすいかずらは、初夏芳香のある白い花を咲かせる。冬にも葉が萎まないで、初冬の名がある。花は散る頃には黄色となり、刻の流れに一抹の寂しさを覚える。園芸店の物ではない身近な花々に、心を寄せる作者。どうぞ健やかに過ごして下さい。

並足の馬の調教梅雨晴間  
通し鴨動物園を住処とす

乗用・競争用・競技用全ての馬は先ず調教から始まる。人や馬具に慣れる事、歩く速さを習得する。並足は最もゆるやかなもので、一分間に約八六メートル。速足は一分間二百メートル。厳しくも優しく季語がピタリとはまっている。春北へ帰らず雛を育てる鴨を筆者の近くでも見掛ける。空・水・陸自由な鴨が、動物園を住処にしている。安心安全な場を本能で見つけたのであろう。生命力を感じる二句。

本土狐ほつそりとして夏毛なる  
児の声に縞馬縞をほぐし夏  
声張りて虎のいらいら梅雨の空

狐は冬の季語ではあるが、この狐は動物園のそれと見た。イヌ科なので、夏には大量の毛が抜け変わり、更に痩せて見える。動物園には多くの子供の声が弾む。見られる為に飼われている縞馬は子供が好きなであろう。縞をほぐすのは、リラックスしている証拠。梅雨は人だけでなく動物も気が重いか、虎がいらついている。虎の生の声を聞くことはめったにないが、余程ストレスを溜めていたのであろう。いつも何かと心配りのかつ子さんの、気付きの御句である。

◇有らぬもの（十月号）

境 延昭

有らぬもの有らぬところに虫払ひ  
書を曝すイニシアルにあるロシア文字

探しても見つからなかつた物が、思いもよらぬ所から出て来た。あるいは、全く覚えても居なかつた物かも知れない。何れにしても、虫干しの時に発見した喜びに又しても作業の手が止まる。干した本は洋書か翻訳書か。頭文字にはロシア語が使われている。ハードカバーの立派な本に違いない。作者の造詣の深さが窺われる。

新涼の棚のコンヤック壺は空

空の酒壺。中身はともかく、作者にとつては壺の存在その物に思い入れがある。それを手に入れた経緯と高級ブランドの豊潤な香が漂い、新涼が一層の清清しさを与える。

捨てきれぬ名画のパンフ秋の虹  
読めぬ字の豪華図録や秋ともし

好きか嫌いか、思い切りが良いかどうか。斯くいう筆者も物を捨てられない性分。遙か昔の親や姉妹からの荷にあつた走り書きもその一つ。作者は嘗ての映画のパンフレットを保存思い出とはそう言う物で、秋の虹の様に美しく儂い。手放せば二度と戻らない故に大切なのである。読めぬ字の豪華図録とはどの様な物なのか。秋の夜ゆつくり読み解くのも、これからの楽しみの一つになるかも知れない。

◇名水瓜割公園（十月号）

島津初花

谷川を囃すおはぐる蜻蛉かな

名水の公園に流れる川には、羽黒蜻蛉が静かに飛び交う。無言の景色の中に動く物が居ると、その場はより生き生きとして来る。「囃す」で命が漲る。

八十八仏御堂へ響く蝉しぐれ  
滝音は弾き終止符のなき楽譜

山の中腹の大師堂周辺の八十八体の石仏が、訪う人の心を和らげてくれる。この静寂の中の蝉しぐれは、その場へ足を運んだ人へのご褒美で、心洗われる景色である。滝の水は一瞬として止まる事はなく、名水の其所は滝の音さえも美しい。「終止符のなき楽譜」とは、何て素敵な表現であろう。

夏空へ筒抜けなりし鯉の口  
美しき碑文字を伝ふ滝の水

スカツと抜けるように明るく他意のない一句。公園等で飼われている鯉は、人の気配を察知すると挙つて集まつて来るや否や大きな口を天へ向ける。「筒抜け」とは言い得て妙又、季語もこれ以外は思い当らない。二句目八月の猛暑の中での句碑清掃本当にご苦勞様でした。一度出会つたら誰もがファンになる若狭の方々温好且つ素朴な佇まい。暑さの中和氣藹々と作業に励む。仕上げには磨かれた句碑に、とびきり冷たい滝の水を注ぐ。歴代の主宰達のお札の言葉が聞こえて来そう。仕事前、水に沈めたくず餅は食べ時ですな。

# 硯箱

◆季音十月

井口俊晴

風鈴やガラス器ひびく奥座敷

波多野寿子

さがまた気に入っている。全てが人工的で、潤いが乏しくなつた日常に、ちよつとだけ異議を唱えてみたいのだ。

病棟の夜間出口や火取虫

石山かつ子

下町の料亭に、気の合った人とお昼を食べに行った。通された部屋はさして広くはないが、学生時代からの遠慮がいらぬ仲間ばかりなので寛げる。どこからだろうか、先客がいらぬと思しき奥の部屋から、仲居さんの声と配膳の時に立てるガラスの食器の澄んだ音が聞こえてくる。そう言えば、さつき廊下を歩いて来た時に、軒に吊るされた江戸風鈴が鳴っていた。

青シャツに貝の釦や夏来たる

山中みどり

入院している友人を見舞ったら、思いのほか遅くなつてしまった。日暮れまで、まだ時間があると高を括っていたら、正面玄関が閉まつてしまい、裏の夜間出口に回された。ドアを開けると、頭上の照明灯に小さな蛾や蚊が群がっているのが見えた。すぐ前の通りには家路を急ぐ人の姿がちらほら。別れてきた友人は、これから病室でたった一人の夕食を食べることだろう。寂寥という言葉が頭をよぎる。

盆踊互ひに老いて行き違ふ

小倉 倭子

鬱陶しかった雨の季節が去って夏がやって来た。暑い毎日に備え、汗っかきの私は綿のシャツが定番だ。それも、湘南の海を連想させる青色でなくてはいけない。襟元や袖口には、キラッと光る貝のボタンが付いている。プラスチック製と違って、アイロンが当たったりすると欠けてしまうが、その脆

何年ぶりかで帰省して、家族と田舎の夏祭りを楽しんだ。子供たちはすっかり大きくなって、親戚の人にびっくりされた。その夜、盆踊りの和に入って踊っていたら、あらっと思

う人が踊っていた。高校生の頃だったか、二人して放課後の教室に残って話し込んだりしたものだ。その後、彼は京都の大学に入り、私は東京の大学へ。それきり会えなくなってしまう。二人とも年を取り、分別もあって、そのまますれ違っただけ…。

### 南溟より帰らざる父土用波

荒井 俱子

海水浴客が去った砂浜に土用波が打ち寄せる。日本の遙か南方、赤道付近の海上に発生した台風によるもので、土用波が来る頃になったら、そろそろ遊泳は危険だと言われる。また、土用波には特別に思いを抱く人も多い。ミッドウエー海戦やソロモン海戦など、太平洋戦争の激戦で散った人々の遺族たちだ。父親や兄や弟など、数えきれない肉親を飲み込んだ南の海。「南溟より帰らざる父」という言葉のなんと重いことか。

### 仰天の蜥蜴慌てて尾を忘る

松宮 保人

庭仕事のスコップが、たまたま飛び出してきた蜥蜴に触ってしまった。こちらもびっくりしたが、可哀そうだったのは蜥蜴だ。「蜥蜴の尻尾切り」の言葉そのままに、まだビクビク動いている尾の先端を残して逃げ去った。「仰天」慌てて

「忘る」の文字が、庭の一角で起きた憐れな小動物の事故を伝えている。

### 地球から溢れ出てゐる夏の海

正木 萬蝶

地球が誕生して何十億年経ったことか。そして太古の海が生まれ…。真夏の海辺に立っていると、そんな宇宙の神秘につながる思いが尽きない。寄せては返す波。その波頭が崩れる音が永遠に繰り返されるような気がする。真つ暗な宇宙の中で、生命を育む地球と言う水の星から、悠久の時を超えて湧き出して来る海の水。それは溢れ出てるとしか言いようがない神秘なのだ。

### 夢の座に一句出でよと大昼寝

後藤 綾子

いくら考えても、よい句が思い浮かばない。どれもこれも月並みで、月例の句会まで時間がないというのに焦ってしまふ。あまり根を詰め過ぎて疲れたので、少しばかり休むことにした。ひよっとして、夢によい句が現れるかもしれないではないか。ええい、果報は寝て待てだ。ちよっとはしたくないが、思い切り手足を伸ばして昼寝をしてみました。あっけらかんとして、なかなか豪快な句である。

# 季音雪



ガラス窓 境 延昭

小鳥来る木造校舎のガラス窓  
野菊一輪添へて紫紺の袷紗かな  
こほろぎや闇に目瞑るひとの癖  
初もみぢ猪に仕掛くる鉄の罨  
秋裕たばこの痕が前袴みごろ

俳 縁 椎野美代子

零余子取るどれもちがつてどれもいい  
零余子蔓血縁地縁俳縁も  
戸籍より又一人出づ零余子飯  
むかごめし手足土着の父ゆづり  
むかごめし里の暮色も炊きこみて

野の花 島津初花

川風や芒が原の大うねり  
倒れてもはや立ち登る秋桜  
雨粒や野菊は草に縋りつき  
芯強き紫苑は庭の隅に立ち  
ビロードの紅を極めし鶏頭花

黒葡萄 鈴木康世

草の花小さき瞽女の無縁塚  
みどり児の産毛きらきら秋桜  
逢うて別れ消えぬ面影黒葡萄  
爽やかに老いて支へとなる姉妹  
見納めになるやも富士の秋夕焼

新松子 田寺玲子

整然と海向く埴輪秋夕焼  
秋灯をこぼし沖ゆく新造船  
海峡の紺青の空鳥渡る  
新松子沖つ白波ひかり立つ  
菊の香や白壁つづく屋敷町

南 無 永野史代

菩提寺へつづく道なり葛の花  
月の軸掛けて月夜を豊かにす  
帯にさせば母の矜恃や秋扇  
子の遊ぶ南無なむ数珠玉南無ずご  
数珠玉どつさり方丈さんちの子が仲間

現身 西山 貴美子

ホルンの調べ 星野 和葉

一日を大事に生きて曼珠沙華  
そぞろ寒お好み焼をリクエスト  
たつぷりと生きて転げて月見豆  
現身うそみの声を真向に温め酒  
有線の丸きアンテナ秋夕焼

あの中の光る一つよ星月夜  
星月夜ホルンの調べ降りさうな  
産土に昔語りをとろろ汁  
加齢てふ逃げ道のありとろろ汁  
分かち合ふ互ひの痛みとろろ汁

秋 深し 波多野 寿子

色 鳥 来 茂木 和子

「生きすぎたね」と友と笑ふや秋深し  
おすべらかしの様に枝垂れて式部の実  
小説を拾ひ読みして夜の長し  
舟遠し花梨並木の諏訪湖畔  
庭石をひき立ててゐる縞薄

通草蔓空もろともに引きおろす  
通草熟れ山姥の手が伸びてくる  
通草の実帰りの雨のむらさきに  
枝移りするたび色鳥いろこぼす  
別別にひいふうみいよ色鳥来



晩秋 矢作水尾

晩秋の空突き上ぐる大櫓  
上棟の新酒が匂ふ祝ひ唄  
菊人形美しくはかなき着替への日  
組まれゆく踊櫓の縄匂ふ  
雲ちぎれちぎれて秋の深みゆく

無口 山中順子

無口な人と居れば無口に青蜜柑  
ブルースが港に流れ青みかん  
そこまでの小さき旅も菊日和  
今年もまた母の忌に咲く帰り花  
夕さは薄紫に崩れ築

冬近し 山中みどり

断捨離とは酷きことばよ秋日和  
捨てられぬものは己よ木守柿  
鶴頸の白磁に紅き冬の薔薇  
焙じ茶の香り小春の人形町  
小春かな下町薄焼の塩煎餅

長月 由良ゆら女

蒼天に豆柿万の灯を点す  
敗荷や幾何の教師に片思ひ  
蛇穴に何やら腹のつかへけり  
止り木に無言の二人炉火恋し  
初雁の声こぼしゆく夜空かな

柿落葉 吉住光弥

おだてられ残り世縮の初紅葉  
暁天に初紅葉一つ氣息殺し  
熟れし通草そつと手渡す男の子  
通草裂け教会の道男替ふ  
ラストダンス朝日の綺羅と柿落葉

銃声とは 網野月を

中指の露を親指拭ひけり  
鑄造のベンチは露に立ち話  
あなた色に染まる息子や衣被  
朝寒やお前の尻尾温かろう  
蚯蚓鳴く銃口からは声が出て

幕間 石井喜恵

幕間に触れ合ふ袂秋裕  
幕下りてこの世にもどる秋扇  
観劇の軽き疲れや秋時雨  
暮れ際の街はモノトーン秋時雨  
深深と烟る竹林秋時雨

夕日の色 石山かつ子

歩数計に叱咤されをり秋の昼  
通草の実夕日の色に磨かれて  
秋晴や畑に携帯ラジオ鳴る  
菊人形姫の裾より着せ始む  
けむり茸人にも序列ありにけり

長き夜の 大橋 廻代

口笛に呼応のとんび秋気澄む  
手を打つや跳んでみせたる鱈小し  
飛べば金色とまればただの飛蝗かな  
陽のほふ古道やばつた追ふ蟻蚶  
長き夜の耳に棲みつくケーセラ―セラ

乱るる 大村 節代

鶏鳴や呼吸ととのへ菊手入  
かくれん坊の鬼の飛び出す薄原  
すすき桔梗大きな壺に萩も活け  
秋裕うつし身包み悪女めく  
胸元の触れて乱るる秋裕

糸切 齒 栢尾 さく子

はらわたを引き裂きに来る朝の百舌鳥  
吹かれゐて皺深くなる烏瓜  
冬天や笑へば似合ふ糸切齒  
辿る道隈なく見ゆる星月夜  
生れつ消えつ離りゆくなり秋の滯

渡り鳥 菊池 ひろこ

渡り鳥失せし太古の海岸線  
鳥渡り足漕ぎボート競ふ子ら  
秋深き廊に老舗の紙袋  
背景にしりぞき露の石灯笼  
不規則な忌日の出入り露葎

秋 郊 五明 昇

爽涼や比叡へ急ぐ笠の列  
益子の瓶に風ごと活ける秋桜  
女案山子が胸乳を反らす上州路  
小鳥来る絵島屋敷の格子窓  
秋高し木立を凌ぐ御柱おんばしら

☆ ☆

角川『俳句』別冊「カドカワムック」

12月7日  
発売予定

予価 3000円(税込み)

# 俳句年鑑 2021

年版  
2019.10・2020.9

口絵

二〇二〇年一〇〇〇句選……岸本尚毅選  
写真でたどる二〇二〇年の俳壇

【巻頭提言】

井上弘美

年代別 二〇二〇年の収穫

諸家自選五句……約六〇〇名！

今年の句集ベスト15

四協会の一年  
各俳句賞のひとつとほか

今年の評論ベスト7

合評鼎談

山尾玉藻・三村純也・山口昭男  
今年の秀句を振り返る  
〈令和俳壇「心に残る秀句」発表！〉

総集編

●全国結社・俳誌 一年の動向 都道府県別目次付き！

●全国俳人住所録 約三三〇〇名を一挙掲載！

KADOKAWA

発行：角川文化振興財団 発売：株式会社KADOKAWA  
●お問い合わせ先(注文) TEL.0570-002-008 (KADOKAWA購入窓口)

# 季音月

檻の猪

十倉和子

山越えの月を迎ふる檻の猪  
扉開ければ銀河へつづく山の宿  
「たけくらべ」イヤホンで聴く夜長かな  
夜長酒戦鬪語り出す百歳  
鬪士いま菊百鉢にかかりきり

以心伝心

小倉倭子

唯ひとり紫煙くゆらし秋の浜  
亡き人の蔵書に触るる暮の秋  
秋あかね句帳に遺句の走り書き  
伝書鳩ひかりを放ち霧の橋  
胸せの以心伝心ボージョレヌーボー

文楽

柚木治子

出し汁のしみじみ香る秋の朝  
文楽の「くどき」に見入る秋裕  
振れば鳴る妬心の色や唐辛子  
革命の王妃のポスター唐辛子  
むさし野や案山子息づく夕日影

新蕎麦

宇田白鷺

朝の雲みるみるみる鰯雲となり  
母はまだ生まれておらず震災忌  
南北へすれちがふ雲秋うらら  
新蕎麦を音立て啜る礼儀かな  
見た事もない小鳥来て庭楽し

菊日和

丸山マスマ

モノクロのシネマ帰りの秋裕  
横座には父をりしこととろる汁  
舟で行く花嫁御寮菊日和  
天神様の夜の細道蚯蚓鳴く  
陋屋にいたはり住むや女郎花

むかご飯 高島寛治

学食に手書きのメニューむかご飯  
生業の響き訝す秋の朝  
捨てるには見目好かりけり案山子かな  
秋の朝空が大きく育ちけり  
星月夜埴輪に意志ある佇まひ

冬来る 鳥羽和風

年縞の五湖を産湯に鴉  
茶の花や白の明るさ地を照らす  
冬紅葉句帳にとづる赤子の手  
初時雨 鬣負の馬は重上手  
廢屋の索莫として冬に入る

二〇二〇秋 森本早苗

長き夜や志ん生 嘶ぎつくざく  
月今宵 吾も彼の人も 卯年  
遺愛の徳利月見団子の脇に置く  
薄紫の香の匂ひ立つ 零余子飯  
木犀散る 新型コロナ収まらず

白い雀 森田祥絵

雲眩し 浅間裾引く大花野  
ふとそるる友の心や烏瓜  
赤い実が一つ弾けて秋深む  
眠られぬ鯉の音する夜 這星  
秋高し 白い雀となりにけり

菊の傘 井上燈女

咲き競ふ百を一つに菊の傘  
菊花展 大臣賞の札 光る  
新米へ括りつけある母の文  
水加減 今日より変へて新米研ぐ  
振り向きし顔の白さや秋の風

村芝居 荒井俱子

隣り合ふ寺と氏神 小鳥来る  
小鳥来る 誰もが知らぬ木の名前  
村芝居 子役の声が裏返る  
裏方も務むる 主役村芝居  
ぐい呑は 九谷を選び新走

鴉 一声 山田 美佐尾

一輪のりんだう凜と竹刀置く  
黒堀や客待つ部屋の濃りんだう  
走り蕎麦粋な男が音たてて  
鴉 一声 鴉 の体内貫けり  
鴉啼きてこの山路を司る

初紅葉 大場 順子

芙蓉閉ぢやさしき一日全うす  
朱の椀に新蕎麦を足す紺緋  
婚の荷へ一枝挿む初紅葉  
そよ風のふつと浮力となる花野  
カリヨンの丘に銜し天高し

青蜜柑 森川 義子

晩秋や狼煙のやうな畑けむり  
お茶室に入る朱の帯菊日和  
朝顔の紫極む今朝の色  
チャイム鳴る校舎の裏の青蜜柑  
万屋の猫の擦り寄る秋の夜

十三夜 松本 光子

水打ちて盛り塩左右に今日の月  
十三夜しばし雨戸を開けしまま  
猫の鈴我を呼ぶかと十三夜  
都去る友よ名残りの十三夜  
母の背で聞きし軍歌や後の月

コスモス野 内田 恵子

計算外の悪役の恋コスモス野  
ビンテージジーンズの少女通草裂け  
ゴーヤ熟れ真つ赤な目玉飛び散れり  
秋の原姫は馬上に横坐り  
色鳥やお手玉作る裁ち落し

鰯雲 川崎 道子

鰯雲うつる水面に投網打つ  
おづおづと体験入園新松子  
芒野の迷路抜け出るたび歓声  
鴉日和トロッコ電車におどけ鬼  
草の絮一日二便の航空機

夜寒

原田 想子

秋の風めくる句帳の白さかな  
蔓引けば遠くに揺れてからす瓜  
我は上妻は下枝松手入れ  
風音に应ふる如く落葉舞ふ  
大あくび二階へ上がる夜寒かな

走り蕎麦

松宮 保人

ぬつと出る蟻螂に退く草の陰  
土蔵に錆び庖丁や走り蕎麦  
新蕎麦の旗閃くや峠茶屋  
秋風や畑に出たがる母を止め  
古戦場湖より来る秋の蝶

夜長

伊藤 敦子

名月や池の鯉さへ顔見せて  
名月や通天閣を道連れに  
句帳繰り来し方偲ぶ夜長かな  
生かさされて献体思ふ夜長かな  
天高し吾の指強く掴みし嬰

天高し

岡野 順子

天高しもくもくと雲立ちのぼる  
秋高し水上バスも上げ潮も  
天高し高速艇の速さかな  
空高し採血あとの手を振りて  
秋高しコーヒーの味しみじみと

秋の蟬

白井 由美

門の中転がつてゐる秋の蟬  
信州の旅の末席走り蕎麦  
新蕎麦を共に食べたき人遠し  
雲離る満月頭上に一人占め  
風に散る鳶の葉拾ふ朝一番

日ぐれ

町野 広子

ほうせん花空缶溜る勝手口  
みみず鳴く日ぐれに糸のやうな雨  
みみず鳴く東野圭吾のミステリー  
湯上りの素つびんでゐる月の夜  
使つても使はなくても秋扇



花サフラン 渡辺 舍人

花サフラン午後の恋人たち明るし  
コスモスやなほ天上のひとを待ち  
落涙の転生うすばかげろふか  
インバウンド寿司に岩塩レモン汁  
反照の雲華湖面に枯はちす

ちちろ虫 藤澤 喜久

はたと止む踏み入る杖にちちろ虫  
秋高しちまちますなと腹の虫  
深秋や会津の「赤べこ」ご機嫌さん  
やや寒に手繋ぎ拒否の三才児  
秋高しペットシヨップのベビー服

招き猫 池田 雅夫

半年の覚悟揺るがず冬に入る  
冬晴の街閑散と招き猫  
往來の歩調まちまち小春かな  
冬構して安心の妻の酌  
夕時雨尻からげしてひとつ走り

新米 加藤 むら子

新米の直売試食長い列  
町の地図平明なりぬ薄紅葉  
考へのまともまらぬ夜虫集く  
展望す一点我が家秋の町  
県内に残る一村曼珠沙華

峡住居 井関 礼子

空の青地上のみち峡住居  
庭隅にとつじよ一本彼岸花  
木犀の香や郷愁のふと過り  
故郷は遙かなるかな青みかん  
栗きんとん老舗の深みほろほと

☆ ☆

# 季音花

秋さまじま

松井 由紀子

虫の音を聴きわけてゐる看取りの夜  
 ふくら脛まで這ひのぼる秋の雨  
 ひと駅をひとりて歩く夕月夜  
 山峡は母のふところ蕎麦の花  
 妻が妻らしくなりゆく秋裕

秋深し

井上 玲子

秋深し洪鐘わたる嵯峨野路  
 脚絆履く牧水像や鳥渡る  
 百舌高音玻璃戸に罅を走らせて  
 古民家の梁の太さよ零余子飯  
 赤い羽根つけ颯爽と美術館

紫の雲路

近藤 徹平

紫の雲路たづねて大花野  
 板の間に大の字床下にちちろ  
 虫時雨終電あとの車輻基地  
 下駄箱に潜みゐる文青蜜柑  
 稲刈機に径をゆづるや茜雲

瓢の笛

梅澤 佐江

もてなしは藻塩で握る今年米  
 枝先に日干し夜干しや鴟の贅  
 朝風にそよぐ櫓や遠筑波  
 雑踏にほぼと灯りて愛の羽根  
 瓢の笛愛しき日々の甦る

抜け道

正木 萬蝶

手に馴染む秋の扇のほころびよ  
 抜け道へにぎる合鍵居待月  
 後朝の耳朶や項や露白し  
 露けしや阿吽で歩む熊野古道  
 秋高や分水嶺の黝し

里の秋 井口俊晴

助六の見得が決まらぬ村芝居  
ひよつとこが声を張り上げ村芝居  
新酒酌む今宵は二人ほつこりと  
どことなく噛みつきさうに通草爆ぜ  
人里に悔を残して熊眠る

唐辛子 熊倉千重子

コテージは同じ容かたちに鳥渡る  
秋深むきのコレシピを繰る夕べ  
ヴァイオリンの音色震へて深む秋  
風生まれめらめら畑の唐辛子  
唐辛子吊られ魔除けか蔵の町

式部の実 宮崎チアキ

里人の餌付けの鈴や渡り鳥  
結ひ上ぐる髪のみきりと秋裕  
向上心の固まりの子よ式部の実  
畔道の歩みに合はせ跳ぶ蝗  
ひとり居の夜更けの横寝秋の雨

星月夜 大塚茂子

星月夜思ひ出そつと小抽斗  
傾斜畑武甲の裾のそばの花  
明日伐る松の枝枝秋夕焼  
ポンポン菊を根締め挿して華やげり  
思慕深き丹波の栗と文届く

揺れ 河野はるみ

列をなしトラック始動露時雨  
赤い羽根財布忘れて食事券  
鐘楼の真上で鴟の声放つ  
鴟哮て吊橋の揺れおさまらぬ  
枝先にピンクあしらひ萩揺るる

門柱 福田千春

露むぐら門柱のみの地震の跡  
勤行の声高らかに露の庭  
踊り場に鳩来てグルッポー秋うらら  
数珠玉の黒を連ぬる祖母ばばの指  
数珠玉や社に住まふ猫二匹

電子本 野口和子

うそ寒やインク匂はぬ電子本  
秋雨やポストに文の落つる音  
花カンナこの街道は行き止り  
公園の灯りは自動暮早し  
仕付けあるままに捨てられ秋裕

松茸 上戸千津子

金木犀散りて地上の星のごと  
心倣しか酒の匂の青瓢  
松茸かゆるりと待とう未だ走り  
石の上木の実落ちるや二段跳  
栗の香に久闊の友丹波道

秋寒の夜 野平美紗子

秋天を飛行機雲が真つ二つ  
消防車の行方に赤き月上る  
消灯の窓辺幽かに虫の声  
秋の朝楽譜を前に弾くオルガン  
秋寒の夜や天頂の星仰ぐ

案山子 宮崎雅訓

十六夜や酔ひの回りは遅くなり  
掃除して故郷空き家を秋宿と  
あなうれし案山子は母校の体育着  
草野球鴉の声援受けながら  
爆笑の渦目まぐるし猫じやらし

浜離宮 松山清子

曼珠沙華江戸の石垣見上ぐれば  
鯉飛ぶや潮入り池のティータイム  
花嫁はカメラの目線酔芙蓉  
出航の警笛たかく秋の天  
甲州の車窓に揺るる吊し柿

今年酒 田中章嘉

溜息も藁の束子で鋏納  
秋空へ帆柱高く波眩し  
業平橋六三四聳えて菊供養  
厨から匂もれ来る蒸し甘藷  
いさぎよく雨のひと日は今年酒

数珠玉 菅原知子

眠れぬ夜癒してくる残る虫  
蜚蠊一匹完膚無きまで仕留めたり  
数珠玉に思ひ出つなぎ母傘寿  
芋の露ふくらみ落下地に還る  
思ひ出は深くたたまれ秋扇

初紅葉 下川光子

城門に俣控ふる初紅葉  
初紅葉愛で山門へひと歩み  
走り蕎麦看板今もなつかしく  
青々と壺の竜胆立ち通す  
民宿の母さん達者むかご飯

露の夜 石田慶子

茹で卵つるんと剥けて露の朝  
露の夜や裏木戸抜けて帰る人  
人住まぬ実家の庭の露時雨  
数珠玉を左手首に副住職  
秋うらら移動図書館やつて来る

秋思 中野 彊

名月を見上ぐる角度揃ひけり  
密閉を防ぎ秋風抜けやすく  
吊橋の僅かにゆれて秋思かな  
秋冷の吊橋の底海光る  
台風や勝手に画く予報円

秋茄子 西浦 千枝子

故里に廃屋目立ち破れ芭蕉  
プランターに固く小さき秋茄子  
作りかけの人形匂ふ夜半の秋  
晩学のドリル投げ出す夜長かな  
探し物見つけて旨し新走り

無人駅 飛永 鼓

八朔や農舎全開風入れて  
露草の藍はきりりと空広し  
枝豆の青さ盛らるる軒端かな  
ふるさとの味に添へたる芒かな  
無人駅芒なびきて下り立ちぬ

紅葉 後藤綾子

草紅葉屋根に力の阿弥陀堂  
腕自慢産地自慢のとろろ汁  
トンネルの合間あひまの山紅葉  
黒々と富士の威厳や秋夕焼  
陽に映えて桜落葉の散りに散る

☆ ☆

# 俳句

## 12月号 予告

11月25日発売  
予価(本体864円+税)

特別作品 鷹羽狩行・行方克巳・小林貴子

### 冬・新年の季語入門

今井聖

#### 大特集

- ▼総論………
- ▼冬の季語 本意と実作ポイント
- ▼天文／時候・地理／生活・行事／動物／植物
- ▼新年の季語
- ▼本意／家で「新年」を詠むポイント
- ▼作句ワンポイント「年賀状に一句」

### 藤本美和子『冬泉』

#### 句集特集

- ▼人と作品………長嶺千晶
- ▼一句鑑賞………井上弘美・高田正子
- ……………山西雅子・高柳克弘

#### 連載

名句水先案内……小川軽舟／偏愛俳人館……恩田侑布子  
現代俳句時評……白濱一羊／野菜の十二月……南うみを  
漢字四季折々……笹原宏之

シリーズ「コロナの時代の俳人たち 鳥居真里子・しなだしん

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

# 俳誌望見 梅澤佐江

『いには』 令和二年八月号 通巻一四三号

主宰 村上喜代子 発行所 千葉県八千代市

平成一七年四月、村上喜代子が千葉で創刊。師系大野林火。「自然を愛し人間を愛し、初めて出会おう今を楽しむ」を理念とする。(月刊)

主宰句「チバニアン」一二句より

ひとなみに老いて蛭となる腐草

その昔、暑さに蒸れて腐った草や竹の根が蛭に生まれ変わると信じられていた。美しい水面より蛭が舞い、明りを灯しながら飛び交っている。「腐草蛭になる」の季語にしみじみとした心象風景と来し方が重なる。

結葉や個人情報保護シール

他人に覗かれたくないプライバシー保護のシールと初夏のすがすがしい季節の取り合わせ、「結葉」の古い季語が余情を醸して妙味を感じる。

なるやうになりて今在り夏椿

ドリス・デいの「ケ・セラ・セラ」をカバーしたベギー葉山の歌を思い出す。「あれこれ気を探まず大らかに構えて前向きでいれば人生は自分次第でどうにでもしている」と解釈したが、しなやかに悔いなく生きて来られたご様子、こうありたいものである。

旅装解く二の腕に風胡瓜採み

旅を終えてノースリーブに着替え、風を感じながらゆった

りと寛く開放感。豪華な膳も良いが、ささっと作る胡瓜採みの素朴な味わいこそ素の時間。

地球史にチバニアンあり青嵐

世界中で使われる地質年代にチバニアンが刻まれた。千葉県の誇りである。誕生から四六億年という長い歴史を持つ地球生成の跡を悠久の時を繋ぐかのように青嵐が吹き渡っている。

全句を通じて達観した人生観が伝わって来る。

そよご集Ⅰ 自選 一四名 各六句より 五名

短夜を詰め込んでる旅靴

遠き山近きみづうみ朴の花

身に着くる緋色一点養花天

散りぎはの石楠花力抜きにけり

蚕豆やゆつくり食めと妻の声

そよご集Ⅱ 主宰選 六四名 各六句より

青年の部屋の匂ひや半夏生

誕生日素颜素足のままにある

いには集 主宰選 一一五名 各六句より

反骨の八十半ば古茶好み

名の店のテイクアウトや春深し

夏兆す担々麵の赤き汁

「いには」とは印旛沼周辺の地名で、万葉集に防人の歌の作者の在所として「印波」と記されている。この「いには」を単なる地名を超えて人の心の故郷であり文学の原点である万葉集の時代に立ち返り、大らかで明るく俳句を楽しむという主宰の俳誌創刊の精神が浸透していると感じた。

田中麻衣

中村重雄

滝口滋子

坂本茉莉

山崎照三

三名

堀合優子

森竹さち子

吉永寿美子

柴崎正義

正木正義

南川久美子

# 現代俳句鑑賞

## 網野月を

罌粟をすくからだのどこも柔らかく

遠山 陽子

〔俳句界〕10月号・新作巻頭から〕

俳句で詠み果せる事柄の広さと深さを驚嘆をもって感じる句である。そして詠んだ事事の文字通り何と柔軟なことであろうか！中七座五は上五の動詞「蒔く」に繋がっていて、統一感十分の一句なのである。他に「白秋の箸より軽き骨を揚ぐ」がある。

木豇豆の実を一人づつ見てきたり

佐藤 麻績

〔俳句界〕10月号・篠笛より〕

上五の季語「木豇豆」はノウゼンカズラ科に属している。果実が細長い蒴果であり、ササゲ（豇豆・大角豆）に似るのでキササゲ（木豇豆・木大角豆）というそうである。掲句では「木豇豆の実」で秋の季語として使われている。「あつたわよ」という誰かの報告を受けて、一人また一人、そして一人と見に行つて来たのであろうが、「一人づつ」という様子なのである。座五の「見てきたり」の丁寧な叙法がその際の時の流れまでも表現している。

大花野始発のほかは無人駅

伊藤 政美

〔俳句〕10月号・風土吟詠欄より〕

「四日市あすなろう鉄道（超狭軌鉄道）」という前書きがある。あすなろう四日市から内部までの全八駅の内部線と支線の八王子線、一駅からなっている。線路幅の狭い、ナローゲージ（狭軌）というそうだが、線路が鉄道ファンの間では有名なのである。その狭さ何と七六二ミリメートルである。

上五の季語「大花野」はこの鉄道のすべてを物語っている。大きな把握であると同時に繊細な把握である。

老鶯や時折変はる節回し

森清 堯

〔俳句〕10月号・節回しより〕

作者の姿勢が窺い知れる一句である。ふと鶯に気付いただけではない。その後には鶯の声を傾けているのだ。聞き入っているのだ。上五の切れ字「……や」は、気付きと感嘆、そして時間の経過も表している。「時折」の間の叙し方にも作者のその場での「老鶯」への対応の仕様が込められているように感じられる。

未来図は直線多し早稲の花

鍵和田柚子

〔俳壇〕10月号・追悼鍵和田柚子より〕



特集の三十句選は高弟のお一人藤田直子さんに拠る。掲句は『未来図』（卯辰山文庫、昭和五十一年刊）掲載の句である。四十年以上前の御句は、作者の若々しさを十分に表しているように思う。そして句意自体が、意欲満々な「未来図」を企図している。決意の句なのである。謹んでご冥福をお祈りするものである。他に「老いるとは飯のこぼるる寒椿」（『火は禱り』角川文化振興財団、令和元年刊）がある。

### 爆発してこそその爆弾草いきれ

中村 猛虎

（俳壇）10月号・ストレスより

「ストレス」の題が付されている。その中で掲句はストレスの方向性が異なるもののように筆者は感じた。むしろこの「爆弾」が発見されて後はストレス十分なのであるが。座五の季語「草いきれ」の幹旋が秀抜である。空間と時間の設定から、皮膚感覚に至るまでびったりであり、にもかかわらずいわゆる付き過ぎ感もない。他に「カフカ読み終えれば足下の出水」がある。

### 箱詰のみな炎むらなす桃の尻

波戸岡 旭

（俳句四季）10月号・白桃より

「炎むらなす」は作者独特の感性であろうか。触れてみれば、幾分ひんやりとしているような気もするのだが、作者は熱量を感じている。もしかしたら温度ではなくてその様子に「炎」を感じ取ったのかもしれない。少々産毛が生えているように見える桃の表皮には、艶めかしささえ感じることがあ

るが、箱の中で桃は競い合っているのかも知れないと、掲句を読んで気付いた。作者の感性に脱帽である。

### 柵越ゆる南瓜あだ花ばかりなる

犬飼 孝昌

（俳句四季）10月号・輪中村より

将にそうなのである。農家ばかりではない、家庭菜園でも南瓜の蔓には一枝に一個ずつの生り物を残すようにするようである。西瓜にしても、メロンなどもそうであろうか。一方で同じウリ科でもユウガオやキュウリの手入れは異なるかもしれない。十年も前にオーストリアの友人のために日本の南瓜の種を（もしかしたら違法行為かも知れないが）持参したことがあった。パーベキューに供するためである。結局、一個しか実らなかったが、その一個は食べ応えがあったのを記憶している。俳句になると植物の哀れと人為の入念さが混在して奥行き深い境地になっている。他に「世渡りに上手下手ありかなぶんぶん」がある。

### 疑問符をつけてぶつかる春の風

夏木 久

（句集「組曲\*構想」・「シンメトリー」より）

「連衆」72号掲載・2015」とある。創意というものは、虚と実の論争を超えている。掲句は作者の創作の延長線上にあつて、決して虚ではない。実かと言えば、誰もが感じ得る実でないことは確かである。春風が冬眠の獣に「まだ起きないの？」と言っているようである。他に「読点をつけり我が家に吹く風へ」がある。

## 俳句と私



## 矢作水尾

平成二十五年、水南通巻一〇〇〇号特別寄稿、「かな女先生と私」と題して書いたものと少し重なりますが、かな女先生と私の出会いは今から七十二年前、私の実家のある神奈川県真鶴町に転地療養に来られた時でした。療養先の院長先生御夫妻が水明同人で、「明月荘」という句会を行なっていました。

私の従兄がこの句会の会員でしたので、かな女先生がいらいしたからと句会へ誘われて出席しました。かな女先生は上品で美しく優しいお声で「詠むこと、作ることはじめなさい」と、御指導して下さいました。何回目かの句会の時、かな女先生から「俳号水尾」を戴き、「これはあなたへの句ですよ」とおっしゃって短冊を下さいました。

山つつじほうたん色に初々し　かな女

戦後まもなくだったので、社会はまだ落つかず、家庭でも代用食で飢えを凌いでいた時代でした。また「物々交換」と

云う言葉もあり、他県から自分の着物を持って野菜や魚と交換する人が来りました。

昭和二十四年、先生が浦和へおかえりになって、以後は、岸町の旧発行所へ投句していましたが、当時は水明誌上で、かな女先生の入選句になるのは大変でした。

当時の水明誌より

大鱈の青き光りや宵節句  
鱈たたく母と二人の宵祭  
夜の波大きくなりて秋めきぬ  
月影につつまれて町ゆたかなり  
山栗の山と盛られて親しけれ

昭和二十六年遠距離通勤となり、句会に参加できなくなつて、俳句から遠ざかっておりましたが、川口へ嫁ぎ、子育ても終り、平成十年水明再入会。初句会は川口の第五例会。私は、かな女先生の昭和時代の句会を記憶に出席しました。と

ころが華やかな句会と大人数に驚きました。

中央に紗一先生、明世先生、両隣りに、吉田静二先生、長谷川エミ先生、左右両脇は会員十五名ずつ総勢三十余名に、びっくりしました。最後に紗一先生より「今日の句はよかつたよ」とおっしゃって戴き二度の驚きの句会でした。

何も知らない私は、水明集に投句せずに「花野集」に投句。一年半位投句した頃、例会へ出席している人は「花野集」に投句は出来ませんと云われて、以後は水明集に投句しました。やがて柿の木塾、歩の会、主人亡きあと麗和句会（あとで第五例会と合併）たかな句会、俳句の手ほどき、珊瑚の会、と句会の数も増え楽しく勉強させていただいております。平成十八年一月から光二主宰に引継がれて、私も句会が増えて充実。平成二十六年アイ子からかな女先生よりいただいた「俳号水尾」を名乗っています。

かつて造船会社に勤務していた私は、朝な夕な毎日海、空、船、水平線を見て通勤していました。

次の二句は、平成三十年主宰となられた山本鬼之介先生が評して下さった海の句です。

### 舟縁の蛸ひつばがす日の盛り

（夏季競詠令和元年）

海に係する題材を詠むのを得意とする作者ならではの作

品である。小舟で蛸釣りをしているのか、或いは、蛸が入っている蛸壺を引き上げているのか、何れにしろ捕獲された蛸が逃げだそうと八本の腕を使って藻掻いている様子が、刻々と伝ってくる臨場感の溢れる俳句である。「ひつばがす」が実に良い。

（鬼之介主宰註）

### 雲の峰進水式の斧

（夏季競詠令和二年）

焦点の絞り込まれた爽快な俳句である。大型船でなければ船台進水の方法が採られるので、船名の命名式の後、まさかり型の斧で支綱が切られ、葉玉とシャンパンが割られて新造船が進水台を滑り降り水面に入水する。瀟洒な銀色の斧と、遙か沖合に偉容を誇る入道雲が、この船の前途を祝している。

（鬼之介主宰註）

海に育った私は若くしてかな女先生に、水明に再入会して紗一先生、光二先生、鬼之介先生、順子先生の御指導をいただき、俳句の道へ導いて頂きました。

この度のかな女賞受賞と、卒寿を過ぎて、元気に句会に出席出来る幸せに感謝しております。

諸先生、句友の皆様は心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。

## 自選五十句

矢作水尾

航跡の末広がりぞ初日の出  
オペラグラスに主役引寄せ初芝居  
海老の髭初荷箱よりのぞきけり  
半島に海光たちて初あかり  
春水に守られてゐる逆さ富士  
天井の木目裸婦めく春の風邪  
春分の潮差してゐる船だまり  
対岸は墨田区墨田芦の角  
一語また一語朧へ溶けてゆく  
露座仏の沈思の眼鳥雲に  
海といふ光の器水温む

---

草餅や婆は大ぶり作る癖  
黒猫の来る夜蛸蚪の足生えぬ  
春潮に吸ひ込まれゆく錨かな  
絶筆の夫の一行藤の花  
九十をこえて計あり竹の秋  
旅の夜具少し重くて遠蛙  
海日永楔の如く貨物船  
舟縁の蛸ひつぱがす日の盛り  
過ぎし日を上手に畳み更衣  
豊かなる余生の句作茄子の花  
卒寿てふ心のゆとり白牡丹  
出漁の水尾一直線夏近し  
つつましく生きて今日あり筍飯  
生るる匂ひ朽ちゆく匂ひ木下闇

御料林の眼下に岬薄暑光  
堂々と家紋ひらめく鯉船  
青梅のはしやぎ廻るを洗ひけり  
半島は母艦となりて土用波  
飛魚や海士の胸の貝釦  
夏はじめ海を一つに逗子葉山  
迷はずに海へ突込む荒みこし  
纜ともつなを投ぐる女房鰯雲  
粧ひし鎌倉五山海碧し  
鉄を錬る匠の力天高し  
一湾を真一文字に鰯雲  
戦争を知らぬ子たちと梨を挽ぐ  
退院の夜長うれしき部屋あかり  
れもんは黄色海はいよいよ紺深く

---

隣り合ふシヤネルの五番秋裕  
大楠の樹齡千年秋夕焼  
秩父嶺に雲湧く忌日秋暑し  
絶妙の一手をくらひ秋扇  
伊豆相模囲む一湾鰯雲  
華やぎの刻をたたみて冬の園  
湿原は墨絵の世界鶴凍つる  
掛軸の海の音聴く白障子  
北風や走り根しかと土を抱く  
切干や伊豆の陽たつぷり届きけり  
夜をこめて煮しめの香り寒厨

# アイ子と水尾の海

山中 順子

神奈川県真鶴町が彼女の実家である。転地療養のかな女先生にお会いしたのが始めである。療養先の院長先生御夫妻が開いていた「明日荘句会」に従兄弟に案内されて参加し、選ばれた二句が原点だという。そして「詠むこと」「作ること」から訓えられた今がある。

波の来て大黒鯛のかかりけり  
凍るものみな月光の中にあり  
アイ子

その折かな女先生が短冊にさらさらと

「山つつじほうたん色に初々し」と書いて下さり、「水尾」という俳号を頂いたという。それから長い月日がかかり水明の会員になられたが、人と人との絆は計算の上に成り立つものではないと考えさせられた。

実家のある海に育てられ、戦争も激しくなり、世の中が落ちつかず不安な毎日であったと思うが、かな女先生との出会いと俳句を知った事で何とか平穏な日を過して来られた。そ

の後横浜への遠距離通勤となり俳句から遠去かり、その後山口に嫁ぐことになった。そして浦和にかな女先生が水明の主宰としてご指導していることを知り水明に再び入会されたという。

その頃の水明誌から

鯆たたく母と二人の宵祭  
夜の波大きくなりて秋めきぬ  
月影につつまれて町ゆたかなり  
大鯆の青き光りや宵節句  
山栗の山と盛られて親しけれ  
水尾

これが水尾俳句の原点であり、ここから水尾俳句の充実が開花したのでしよう。真鶴は熱海の一つ前の駅であり、漁村のため魚は豊かかつ新鮮でおいしい。私もよく熱海に遊びに行っていたので真鶴はなつかしい。小さな漁港であるが特産の鯆の干物は見事であり、その海の色を句に詠み込むので海の句は強い。

アイ子時代から水尾時代に入ると更に海の句が多い。

航跡の末広がりぞ初日の出  
半島に海光たちて初あかり

年の始めは海の光りに抱かれ一年の大きな希望を胸に誓ったのでしよう。私は山国なので山の端から上ってくる太陽も又柔らかく包んでくれた記憶がある。この辺までがアイ子時代であろう。これからが水明に平成十年に入会した水尾さんの存在が明らかになってくる。



句会が一緒でなかったので私の記憶の中に存在しなかったが、小柄な俳句のうまい方が川口にいらっしやることは話の中にあつた。あの頃は川口には若い人たちが活躍し、永瀬千枝子さんが幹事のもと信頼の出来る句会が水明誌をにぎやかしていた。

その後平成二六年に俳号「水尾」に変えてからの活躍は群を抜いていた。かな女先生に頂いた俳号「水尾」の活躍が目ざましく、私も行事部の仕事をしていた関係で名前の覚えは深かつた。

春分の潮差してゐる船だまり

舟縁の蛸ひつばがす日の盛り

海といふ光の器水温む

出漁の水尾一直線夏近し

春潮に吸ひ込まれゆく錨かな

纜を投ぐる女房鰯雲

海の句を掲げると限りがないが、一句として同類の句はない。海に育てられた環境が自然に身についているからうそがない。海は広いから大らかで何事も受け入れ抱え込んでくれるから作り易い気がする。

その点、私は山国なので山は自己的で何故か拒否されてしまう事がある。だから水尾さんは人の面倒もよく見て下さり、やさしい。

さらに、海の句ばかりではない。次のような句も……。

豊かなる余生の句作茄子の花

茄子の花には無駄花はないというからその人の一生を余生まで約する環境はそうはない。

過ぎし日を上手に畳み更衣

物を大切に、そして正しい生活を送らなければこのような句は出来ないだろう。「上手に畳み」が几帳面な性格と日本の女性そのままの水尾さんを表わしているようだ。

つつましく生きて今日あり筍飯

筍は手のかかる食物である。先ず米ぬかで茹でて、そのまま何時間か置きあくをぬく。後は切ればよいが淡泊な味ゆえむづかしい。出来上った筍飯の匂と味は作った人だけが味わえる至福であろう。

つつましくが今は通用しない世の中になってしまったが、水尾さんを見ていると料理上手で良き妻、良き母であつたであらうと想像する。

半島は母艦となりて土用波

戦争を知らぬ子たちと梨を挽ぐ

隣り合ふシャネルの五番秋裕

旅の夜具少し重くて遠蛙

母であり妻でありそして女らしくあつてシャネルの五番を嗅ぎ当てる等俳人の技でしょう。

これからも私の目標となつて頂くことをお約束して下さい。かな女賞本当にお目出とうございました。

# ぼうたん色に

境 延昭

彫深き少女になりて卒業す アイ子

平成二五年春、「岩槻俳句の手ほどき」での「女」読込みの兼題句である。この年「水明」は創刊一〇〇〇号を迎えその記念号に「かな女先生と私」の特別寄稿が矢作アイ子の名で残っている。アイ子さんの故郷の真鶴にかな女が転地療養の折、句会に参加して「水尾」の名と即席の短冊を「貴女のことよ」と言われ頂戴したそうである。

山つつじほうたん色に初々し かな女

かな女全集巻末の年表に、真鶴滞在は昭和二三年一二月、二四年四月とある。還暦を過ぎたばかりのかな女にはぼうたん色に初々しい少女に見えたのであろう。

冒頭のアイ子はその頃の自らの追想句である。一〇〇〇号を機にかな女命名の水尾に俳号を変えた。

海老の髭初荷箱よりのぞきけり  
春潮に吸ひ込まれゆく錨かな  
出漁の水尾一直線夏近し  
舟縁の蛸ひつぱがす日の盛り  
堂々と家紋ひらめく鰹船  
半島は母艦となりて土用波  
迷はずに海へ突込む荒神興  
纜ともづなを投ぐる女房 鰯雲  
れもんは黄色海はいよいよ紺深く

水尾俳句の特徴は海の句の多いことである。自選五〇句の中でも二〇句程が海の句である。その中で特に夏の季のものが多い。生まれ育ち結婚までを過ごした故郷、神奈川真鶴での経験と暮らしが今、句作りの肥やしとなつて生きている。何より水尾俳句にある具象性は経験あつてこそのものである。

初荷箱より覗く海老の髭、髭に焦点を絞る一句一章の詠みに正月の気分が伝わる。出漁の水尾、新しい己の俳号を詠み込む巧みさ。舟縁の蛸、ひつぱがすの表現が出色である。「引き剥がす」の音便だが相模特有の言葉の様で臨場感がある。土用波の句は梅園の上の幕山からの俯瞰か。大きな景を捉えている。鰯雲の句、船尾で纜を投げる女房を詠むことで、船

先で舵を取る亭主の存在を知る。仲睦まじい夫婦船の帰港である。れもんは黄色、七・七・五のリズムが若々しい。

オペラグラスに主役引き寄せ初芝居  
春兆し肌に溶け込む化粧水  
過ぎし日を上手に畳み更衣  
つつましく生きて今日あり筈飯  
隣り合ふシヤネルの五番秋袷  
無職とも主婦とも書いて十一月

一転して女性らしい、女でなければ詠めぬ六句を引く。オペラグラス持参の観劇、鼻肩の役者の表情だけを追っている。いまでは男性も使用するようだが、肌に溶け込む化粧水の感覚は女でなければ分らない。更衣に過ぎし日を畳む感覚は女そのものであろう。

命日は自作の小鉢木の芽和へ  
絶筆の夫の一行藤の花  
聞き流すことを覚えて夏柳  
爛酒や女房任せの五十年

水尾さんと句座を共にして十年、最初の頃「うちの主人は……」の言葉を耳にした。お惚気と聞き流し、ご主人が健在とばかり思っていた。その水尾さんの夫恋いの四句。酒好き

で筆まめで亭主関白の生前のご主人との五十年の様子が目に浮かぶ。今でも命日には好物であった木の芽和えを手作りの器で供えるのであろう。一行だけの絶筆には何と書かれていたのだろうか。今も生きる支えに違いない。女は聞き流すことを覚えて強くなる。信じ合う者の間合いでもある。だからこそ、暮し向きも子育ても女房任せに出来るのである。この様に作者自身を反映させる句はアイ子から水尾に俳号を変えて以降の変化と思う。余裕と言うべきか、作家としての自信である。

手元の第十三、十四水明抄からアイ子の五句を拾う。

浅利売巾着振つて小銭出す  
鉢力屋の屑は渦巻柳の芽  
手花火のうしろの闇も花火の輪  
海へ向く砲台跡や枇杷熟る  
秋の雲抜いたコルクの栓が飛ぶ

措辞の具象的な表現は現在の水尾句に相通じる。鉢力屋、砲台跡そしてコルクの栓の句など二句対応の句が目立つのはアイ子時代の様である。

最後に直近の水尾句。今年のりんどう忌の句である。

かな女賞受賞に感謝りんどう忌

水明最高の栄誉、かな女賞受賞おめでとう。

# 矢作水尾の

## 一句



葉も茎も紫紺の中に淡い紫の目立たぬ茄子の花。苗を植えて、初めて咲いたこの花を見たときのうれしさ。昔より「親の意見と茄子の花は千に一つの無駄がない。」と伝えられて来たのを思い出す。

茄子の実は、夏の緑の盛んなころの野菜である。そして全国に、土地それぞれの長茄子、丸茄子。色も紫。白。緑とさまざまな茄子が作付されている。

卒寿を過ぎて、これまでの人生には、楽しみも苦しみも心の襷に畳み込んで、「豊かな余生」と言っている。

今、悠悠と俳句に専念されている。句会の中でも、静かな存在でありながら、いつの間にか皆に頼られている水尾さん。奥ゆかしく的確な答を出してくれます。これからも私たちの御姉さんでいてください。

旅の夜具少し重くて遠蛙

春風に誘われ旅に出た。電車やバスを乗り継ぎ、出湯の里の老舗旅館に着いた。風呂で汗を流し、すぐ美味しい夕食。ちよつぷりお酒も。朝が早かったのと酔いも手伝って、いつもより早く横になる。

女中さんが敷いてくれた布団は、田舎の宿らしく、いつも寝ている羽毛布団のように軽く頼りない感じではなく、やや重い昔ながらの布団綿を入れたものだ。その、ちよつと重たい感じが、疲れた体を温かく包み、すぐにも眠れそうな気がする。

でも眠れない。偉いお坊様が開いたという古寺や千年桜の大木、見上げる高さから落ちてくる滝の水、昼間の興奮が残っていて、頭が冴えてしまっている。寝返りを打つと、遠くで蛙が鳴いている。どこか懐かしく、夜の静けさに溶け込むような蛙の声…。

海が近い神奈川県生まれの水尾さんは、外見に似ず、海や舟に因む骨太な秀句が多いが、このように抒情性豊かな句も詠まれる。

## 内田恵子

### 天井の木目裸婦めく春の風邪

海を詠んだ水尾さんの句は雄大で素晴らしい。海の句と違ったこの句の感覚に驚いた。楽しい句である。

洋間の天井は殺風景な漆喰で造られているが、和室の天井は杉や樺の美しい木目の板が使われている。

天井板の木目はおもしろい。じっと見てみるとさまざまな空想が湧き、いつまでも見飽きることがない。

天井の木目を裸婦めくと捉えている。裸婦めくのは春の風邪だからだ。冬のインフルエンザと異なり気怠さや微熱が続くことがあっても、病氣と闘うというより病氣と戯むれ、もて遊ぶ。横になって天井を見上げると、天井の木目が裸婦に見えてくる。もしかしたら踊りを踊っているのかもしれない。この一句は春の風邪の有り様を上手に伝えている。

## 大村節代

### 迷はずに海へ突込む荒みこし

海辺で生まれ育った水尾さんの句は、海の句であふれている。今回の自選五十句も、半数近くが海の句である。その句の中から、揚句を頂いたが、何という勇壮で豪快な句である。ろう。

海を身近に見ない私にとって、海は旅先かテレビで見えるものだと思っていた。ところが生まれながらに海を知りつくした水尾さんは、巧まずして、誰にも詠めない海を、実にあっさりと表現なさる。

揚句の男達は、神霊の乗られた神輿を声を揃えて、心一つにして海に乗り入れ浄める。上五・中七で海の男達の掛声と心意気が伝わって、読み手までその場に立ち合っていたかと思わせてくれる。ただの旅人として海を見ているだけでは、こんなに深く詠めないと思う。この度はおめでとうございます。これから水尾さんの海の句を楽しみにしています。

## 五明 昇

### 春分の潮差してゐる船だまり

春分は言うまでもなく、太陽の中心が春分点上に来た時の称で、春分の日は春の彼岸の中日に当たる。かつては春分、秋分の彼岸の頃が一年中で最も干満の差が大きいとされ、「彼岸潮」の季語（春季）もあるが、最近では日本沿岸の大潮の潮位は夏・冬に極大、春・秋に極小というのが定説となっている。掲句は春分の日夕方、浜辺の潮干狩りの喧噪も絶え、漁船の船溜まりにひたひたと潮が満ちている様を詠んで、そこはかとない寂しさ、春愁を感じさせる。神奈川県生まれの作者には限らない豊穡の海や、そこに生きる人々の暮しを暖かい眼差しで詠い上げた秀句が多く、山国育ちの作者には憧憬の的だ。卒寿を越えられた作者が、水明創刊九〇周年の年に奇しくも栄えあるかな女賞を受賞されたことは慶賀の至りである。益々のご健吟を願って止まない。

## 星野和葉

### 豊かなる余生の句作茄子の花

余生とは、これから先の人生、残りの人生という事であるが、人は何歳から余生とするのか。六十、七十、八十歳と人それぞれに違う。水尾さんは、何歳位から余生と感じたのだろうか。掲句のように、これから先の俳句作り「豊かなる」と…。こんな余裕のある人生とはうらやましい。

季語「茄子の花」で一見、謙遜？かと思つたが、いや、茄子の花は無駄がなく、必ず結実するという。これは作者の隠された自信であろう。他に、水尾さんは何ごとにも身が軽い。その軽さはとてもお齡には見えない。

水尾さんは、神奈川県真鶴の出身で、昭和二十二年頃、療養のためにいらしたかな女先生に出会い、俳句を始めたという。こんなところからも自信と余裕が備わったのかと思う。他にこんな句も。

九十をこえて計あり竹の秋

水尾

## 松本光子

### 一語また一語臚へ溶けてゆく

始めにこの一句が心に残る。発想の着眼点が珍しく、それでいて静かな一句である。

平明であり導入部の「一語また一語」と読んだとき生命の尊さがあり、一語一語が溶けてしまふときに詩が生れる。人の生命の強さ、記憶の確かさ、強さと共に渾然一体となり再生となる。それが「臚」の季語を救う。

又自分に置き変えてみた。明日は我が身という事に二歩も三歩も又手許足許も臚である。情緒のある季語で何んだか哀しくもあるが、覚悟の見える硬質な一句でもある。沢山の季語を覚え語彙を知り、ましてその言葉の中にも人生がある。やさしい言葉、難しい言葉とお喋りの中には簡単にはいかない。文章もこれ然りである。人生光陰矢の如し

水尾さん本当にお目出とうございます。

まだまだお元気で張り切つて下さい。私達の励みです。

## 茂木和子

### 豊かなる余生の句作茄子の花

作者は神奈川県海育ち俳句も海をテーマにした力強いスケールの大きい句が多い中敢えて此の句を選ばせて頂いた。

昭和と云う激動の波を乗り越え尚矍鑠と俳句に向き合つておられる姿に感銘を受けている。

人生の沢山の経験の中から、今豊かな余生だと云い切れる作者の思い、慎ましく謙虚に、しっかりと地に足を張つて力強く生きて来られた証なのだろう。

茄子については諸説あるが他の野菜では余り見かけない蒂と云う部分に鋭い刺のある事を御存じだろうか。そしてあの力の漲つていく様な紺の美しさ。

季語の斡旋と相俟つて好ましい一句になった。

## 森川義子

### 豊かなる余生の句作茄子の花

多くの佳句の中から日常的な一句を戴いた。水尾さんとの出合いは、水明発行所での麗和句会であった。あれから二十年近く、深いお付合いをさせて戴いている。年齢を聞くのは失礼かなあと思いつつお聞きしてみると「九十二歳ですよ」とさらりと返答された。

年齢を感じさせない姿勢、豊饒と各地の句会に出向く行動力に圧倒されている。まさに豊かなる俳句人生を過している。

そんな二年ほど前、水尾さんの流麗な文字の掲句の色紙を戴いた。我が家の床の間に飾つてある。眺めていると、ほのほのとしてくような安らぎと深い感動を覚える。

茄子の花は清楚で、穏やかな水尾さんの日常を思わせる。茄子には品種が多く、独特のものがあるらしい。さて水尾さんの茄子の花は、どんな実になるのか、楽しみである。

## 山田美佐尾

### 半島は母艦となりて土用波

海の近くで育った少女アイ子は、友だちとよく海で遊ぶ。この頃から少女アイ子は海に對する詩心が培われていたのではないでしょうか。水尾さんは海に因んだお句が多い。

私も海が好きです。その一句一句が人を引きつける句で、私は揚句を頂きました。

「半島は母艦となりて」半島を母艦に見てる所がスケールの大きな堂々としたお句です。

その頃かな女師は保養の為海のそばの家に来ていらしたとか。そこで水尾さんはかな女師との俳句の出合いが生まれたのでしょうか。今回の「かな女賞」と運命的なものを感じます。

水尾さんは私たちの「鏡」です。私は水尾さんを目標にして参りたいと思います。

「かな女賞」受賞心よりお祝い申し上げます。

## 吉住 光弥

### 絶筆の夫の一行藤の花

口数の少い夫が、後で考えればこれが最後の、旅先から女房にあってた手紙・からだの調子が悪かったのか、旅で気弱になったのか、柄に似合わぬ情いの言葉など……お天氣が変るよ、女房は心の中でちやかして見たが、心うそ寒い、すさま風のようなものが……

結局これが恋する夫の絶筆になろうとは。

頃は春、御存知藤は春の季語 万葉集の大半四綱の歌にも「藤波の花は盛りになりけり平城の京を思ほすや君」とある。大棚に仕立てられ花房を楽しんだ歴史も長い。

一と房は棚をはづれて闌けし藤

長谷川かな女

沢山の藤の例題も古来、旅の宿のさびしさ、花の色香、妻居ぬ日、幹の蛇身等々お色気の中の孤独感のような使われ方が多い、翻つて「絶筆の夫の一行藤の花」素人の我々が修正加筆するものは何もない。二人の間にゆるる藤の花が美しい。

(なお文中の物語は光弥の勝手な作文御許し下さい)

山本鬼之介 選



秋夕焼生徒二人の連絡船  
蓑虫やメトロノームの気だるき夜

川口 野田 静香

秋夕焼鳥を見送る風見鶏

秋の川友禪染に生宿る  
友船やお国言葉に秋惜しむ

さいたま 曲淵 徹雄

つくつくしたウト旧居は磴の先

秋暑し赤きマスクの六地藏

花数の多きが寂し白芙蓉

相向かひ手酌よろしき走り蕎麦

夕風や星一つ生む大花野

青木 鶴城

高崎 原田 秀子

不意の客先づはひと品衣被  
悠久の古墳を望む新松子

老松に輝く生命新松子

粒選りの巨峰ずしりとバネ秤

笑栗を求めて遙か小布施まで

熊谷 越田 栄子

さいたま 日高 道を

ライオンの声ぞ悲しき夜の秋

化粧する鏡の中の夏灯

秋風や庭に真白き椅子二つ

秋暑し乗換へ駅の人の黙  
夏の灯や島にひとつの診療所

手の皺の語る人生衣被

祖母がゐる母がゐる日々衣被

いつか子も親となりたる新松子

少年の一途な想ひ新松子  
一株の稲の重みを刈り取りぬ



秋冷や朝刊来しもひと眠り  
合の手の漏れくる宿や星月夜  
ミシン踏む音軽やかに爽やかに  
神橋の赤の揺らめき秋の水  
相槌を打ちて見上ぐる鯛雲

さいたま 村杉 清吉

八月や錆びたバイクに油さす  
湧き水を引けば盥に回る桃  
秋草を一抱へして父見舞ふ  
鏡台に欠けし柘植ぐし秋彼岸  
蓑虫の声聴きたくてヘッドホン

さいたま 渋谷さいち

一つ家の曾祖母達者青田波  
病室の西日気遣ふ白衣かな  
競べ馬白馬を御すは美少年  
井戸水に西瓜を浸す太鼓腹  
農道の作柄談義秋初め

保坂 翔太

終電や乗換へ駅の天の川  
仰ぎたるところに確と天の川  
門灯に秋の螢は呼応して  
コロナ禍の約しき卓に女郎花  
風白く目にもさやかに鯛雲

加藤でん治

一筆箋の絵柄を選ぶ今朝の秋  
西瓜に顔埋めて食ひをり球児たち  
嘘つけぬ目の真鯛を朝市に  
芙蓉さき観音堂に朱唇仏  
大花野海が見えたり隠れたり

上 尾 横山 君夫

江ノ電の風に首ふる秋の草  
秋草を備前に活けて客を待つ  
父母に問ふ言の葉あまた秋彼岸  
父母の歳越して手桶の秋彼岸  
夢も恋も深くしまひぬ秋扇

新 曆文

指で腸抜くや真鯛海の色  
歌麿の女ふくよか酔芙蓉  
小さき嘘許さぬ人よ唐辛子  
居酒屋が体温検査秋の風  
手習ひの変体仮名や夜長の灯

さいたま 染谷 正信

秋澄むや地蔵は赤き衣が似合ふ  
歳月の振り子は確かりんどう忌  
稲刈るや四方の山の艶めきぬ  
彩満ちて陽ごと刈りとする稲刈ぞ  
生姜掘る農婦の膝に陽が転げ

熊谷 神田 治江

鰯雲棟上げの酒梁に載る

塩竈の火を焚く男鰯雲

足踏みのオルガン重し長き夜

秋の蚊の必死にすがる下駄の足

美容師の肘のほくろや吾亦紅

秋草の淋しかりけり山の中

色が好き風になびきし吾亦紅

蓑虫の蓑をぬぐ日を知らざりし

露草の鮮やかな色庭隅に

蓑虫は風音知るや枝に揺れ

点りてほつとするや隣家の秋灯

蟋蟀や扁平足は親に似て

ラジオ体操その輪の中に赤とんぼ

働きづめの母を偲べば夜長し

別れ蚊の終の力で我を刺す

吹き降りに秋海棠の俯ける

泉水の鯉ゆつたりと秋海棠

八朔や後継者なき田の広し

枝豆や御国訛のはんなりと

冷凍庫三年前の山椒の実

さいたま 梅澤 輝翠

塩野 久子

西幅 公子

若狭 山崎 郁子

掬ふほどきらめき増せり秋の水

相続に初めて聞く名虫時雨

木洩れ日の跳ぬる隠沼秋の水

花野行く人も小鳥もよく歌ふ

もうこれが終りと貰ふ秋茄子

独り寝の腕惑ひし夜半の秋

子にできぬ説教猫に秋の夜

秋刀魚来い日の本の海甘露なり

芒野を分けて風の子鬼ごっこ

信号待ちで稲の香りを一息に

心ならずも二の腕晒す秋暑し

「みな元氣」てふ声届け秋彼岸

甘き香を胸に抱きぬ林檎風呂

旋回の蜻蛉よ空はなほ広し

無住寺の敷石沈む草の花

爽やかな風野仏の頬を撫づ

爽やかに開会式のファンファーレ

爽やかな空竹垣の散歩道

石塊の顔みな違ふ秋の水

相次いで浮かぶ邪念よ秋座禪

さいたま 橋本 京子

吉川 杉浦 理恵

さいたま 斎藤 みよ

千坂 平通

ごろごろと一日過ごす敗戦日  
人生の長さ短かさ遠花火  
原稿に誤字二つ三つ鱗雲  
方言の上手になりし法師蟬  
センターの球児の肩に赤蜻蛉

さいたま 水野 興二

エレベータ秋夕焼も乗り合はず  
糞虫は見ざる聞かざる話さざる  
二十階秋夕焼の大字宙  
母を待つ秋夕焼の保育園  
琵琶湖畔の秋夕焼や黄泉の国

さいたま 藤岡真知子

秋の朝電子書籍を読み進む  
老木が切り倒されて昼の虫  
静けさの戻りし家よ燕去る  
昏迷の時代を開く秋の海  
不知火の海より還る殉教者

平塚 丸屋 詠子

独り夜の夢想広がる曼珠沙華  
秋灯下読めぬ掛軸惟みる  
旅愁つのらす船の秋灯  
売上げを競ふ平積み秋灯下  
平野一望大平山に秋澄めり

竹澤 和子

檀那寺より枝豆とどき仏前に  
山門に地場の野菜の幟立て  
残り蚊や洗濯物を隠れ家に  
野菜挽ぐ縞の残り蚊なほ強し  
前庭に蒔枝でさすぎ恐ろしき

杉戸 佐々木史女

秋高シロケットを追ふマニアの眼  
秋日傘余裕の目元覗かせて  
破れたる人相書や秋の風  
生まれては儂く消ゆる流れ星  
妻の笑みほどよく焼けし初さんま

反町 修

山深き湯宿は二軒天の川  
銀漢や灯りちらほら飛驒の里  
秋蝶は夫の化身か供花に寄る  
秋灯やまた読み返す夫の文  
水神にまづは奉納今年酒

さいたま 笹本 啓子

敬老日町会祝意のエコバック  
南向くまるい窓辺に小鳥来る  
色鳥や森に真白き美術館  
しゅばしゅばと新米炊ける湯気の中  
参拝し気分爽快走り蕎麦

東京 太田 絹映

釣り糸をたらしめて独り天の川  
二日月空を見上ぐる喉ほとけ  
小鳥来る三坪の庭に置く箒  
尾と頭皿にはみだす秋刀魚かな  
居待月欠けし茶碗に映りけり

若狭 檜鼻ことは

爽やかな青き頭や魚板打つ  
初産の声満潮に鷹渡る  
秋鯖の湧いて火船の波しぶき  
秋鯖や土蔵に眠る大漁旗  
陽が海に早稲の金波にシャッター音

小浜 松島 寛久

新涼や朝の食卓目玉焼  
カーテンのほのかにゆれて秋の風  
無花果や幼き日々の帰り道  
片恋の思ひひきずる秋扇  
縁側に置く口ゴ入りの秋団扇

さいたま 木村るみ子

川に出たら手を繋ごうか夜の秋  
バス待つふたり言葉少なく夜の秋  
ハイボール琥珀弾くる夜の秋  
遠い日の宿題探す夜の秋  
蹲る旅行鞆や夜の秋

東京 山中いちい

群とんぼ全八ヶ岳一望す  
水面ける塩辛とんぼ朝の堀  
修行僧に秋気昂まる永平寺  
読み進むかな女全集長き夜  
秋の蚊にまとひとつかれて採る野菜

森下美智枝

敬老日互ひに笑ひ気遣ひぬ  
児のごとき擦傷膝に秋の風  
横綱の居らぬ秋場所テレビ消す  
電動の鳥追ひ寝かす刈田かな  
いなびかり夜のカーテン開け放ち

横浜 山岸 弘子

芒原遊びし頃の道しるべ  
芒野に潜み暮れゆくかくれんぼ  
沈黙のかな女の句碑や露の玉  
露けしの芝に戸惑ふゴルフ球  
恥ぢらひの俯く少女秋海棠

若狭 岡本 祥子

甲州の陽に透き徹る葡萄挽ぐ  
実も葉も美しき宝のごとき葡萄かな  
うひうひし鬼も十八新松子  
うす紅の季の魁新生姜  
荒川のバス停に佇つ秋夕焼

東京 鈴木 和子

父あらば播粉木の音とろろ汁  
何時の間にひとりの世過ぎとろろ汁

さいたま 高橋 敏子

ジーンズの膝に綻び墓参り  
父母の歩きし道や墓参り  
穴まどひ鞆の奥にパスポート

風孕む裾を舞ひゆく秋の蝶  
月光の文したためる淀の波  
たちろがぬ蠶螂の子スケルトン  
大淀の闇震はせて虫すだく  
秋の月独り舞台や渡月橋

大阪 飯塚智恵子

当節は飛沫も防ぐ秋扇

東京 石川 理恵

線路端のこも小さき花野かな  
距離を取る習慣ついて花野みち  
語学講座のちんぷんかんぷん夜の長し  
夜の長し眠りに落ちるための本

痛み止め眠りを誘ふ秋の夜  
車椅子に追ひつ追はれつ秋の蝶  
点滴をカラカラ押して秋に入る  
突出しの粹な小鉢の柚味噌和へ  
突つ掛けで朝刊を取り涼新た

さいたま 湯浅 和

秩父路に梵鐘一打秋めけり

さいたま 松田 朋子

縦横にコンバイン行く九月の譜  
ホバリングの蜻蛉の群れや光のシヨ  
畦道の車輪のへこみ秋茜  
朝露や村に光の舞ひ降りる

草取りや「御苦労」頭上で父の声  
風は秋死海の泥で顔パツク  
台風に振り廻さるる蜘蛛の糸  
ステイホーム気遣ふ守宮窓のぞく  
残業の娘待つはは月鈴子

藤 沢 小島喜代子

さねかづら訪ひてさ迷ふ山の辺に

伊 予 向井 章子

秋茄子の色に惹かるる無人市  
数珠玉の枯れて天井川白し  
誰が呉れし戸口にそつと秋茄子  
松手入終へて小島の近くなり

この夏も少し汚れし秋扇  
少年に負けし王座の秋扇  
掌に小さき螢火年金受く  
誰彼を目で探しをり盆踊  
忠告は聞かぬつもりの新松子

町 田 瀬戸雄二郎

新涼やバーチャルの中旅気分  
秋宵に酔人猫と戯るる

さいたま 武田 重子

風呂敷の土産の西瓜すぐ桶に  
大西瓜母の一刀に固唾呑む  
秋鯖や出刃を巧みに料理人

曼珠沙華ビルの谷間を照らしをり  
雨上がり甕にあつまる残り蚊よ  
スマホよりクラリネットが長き夜  
手の平にさがせど見えぬ栗の棘  
雄姿遠望スカイツリーの秋灯

さいたま 小川 洋子

ツアー客杜氏を囲み今年酒

長井喜代子

秋灯淡し旧街道に冠木門

菅原 真理

杜氏なるあととり娘今年酒  
酒蔵に笑顔あふるる新走

夜長の黙を食むごと進むミステリー  
早ばやと秋灯点し家人待つ  
爽やかな風を飲み込みヨガポーズ

天の川神話語りし恩師逝く  
天の川泳ぎ渡るか小さき星

爽やかや厚手カップでダーズリン

朝顔に元気をもらふ膝頭

蕨 細井 良子

越 谷 阿部 幸代

はびこりし草が気になる秋海棠  
夏終る激辛カレー平らげて

遅番の主を待ちてちちろ鳴く  
客の無き通夜に鳴き添ふちちろ虫  
歳時記に農事いろいろ大根蒔く

福島の桃に思ひのこもごもと  
桃を剥く五指に香りをしたたらせ

ついと飛ぶ蜻蛉の向かう黄金色  
畑仕事終へて面上げ風さやか

秋扇に心静もる日の有りぬ

さいたま 岡田 宣子

さいたま 森 和子

年頃の女性のしぐさ秋思ふ  
裏庭の無花果を挽くおやつ時

銀河濃し灯火まばらな一揆の地  
揺り椅子の揺れるが儘に天の川  
匂のものひと皿気張り新走り

無花果をそつと皮剥く母の拇指  
秋の蝶仲間を探しさ迷へる

とくとくと音も新酒の旨みなり  
肩書も名刺もなくて新酒酌む

長き夜をとろとろ眠る八十路かな  
チャンバラの子等見えかくれ花野原  
敗戦日焦土鎮めし玉音よ  
花野から花野へ風の撫でゆけり  
Yシャツの袖の折り目や秋彼岸

東京 柳父 はる

秋の蝶介護する友愚痴言はず  
秋の蝶二羽戯れ遊ぶ木の葉なり  
傘寿過ぎけふも元気に夫の秋  
門前の留守番猫や秋の昼  
稲の葉に露光りたる散歩道

和歌山 南條さわゑ

草隠す売地立札虫しぐれ  
新涼の駅前に見る名所図絵  
秋扇耳に溶けさう京訛  
二十年住む他所者のむかごめし  
お目こぼし多きこの頃敬老日

いすみ 平石 睦子

白芙蓉天折画家の裸婦像よ  
赤とんぼ回る木馬の優しき瞳  
砂利道を納骨堂へ秋の蝶  
道頓堀にジャズの流るる秋ひと夜  
水滔滔と唐臼の里の秋

川崎 鈴木 玲子

麦秋の大きうねりや遠筑波  
短夜や昭和語りし姉逝けり  
明易し朝刊届く音のして  
今落暉大枝揺らす夏木立  
冷奴ひんやり香る薬味よし

栃木 佐々木典子

隠れんぼ黙つて居ても萩揺るる  
萩の道いつもスキップハミングで  
天辺に密の朝顔何談議  
月天心嫁御は筆を持ちしまま  
家中の時計確かめたる夜長

横浜 川島 典虎

初秋や魚籠の真鯉の髭長し  
ゆつくりとゆつくりとゆけ風の盆  
静寂と未練の残る風の盆  
蟋蟀よおまへは誰の化身なの  
この年で俺もなりたやこほろぎに

さいたま 飯田 忠男

夕空に一筆書きす秋茜  
花野ゆくあの花の名はこの花は  
あきつ群れ棚田だんだん暮れゆけり  
夕花野昔を語る媼をり  
花野来て画家を気取りて遠近法

さいたま 白田 みち

群れ嫌ひ王者の舞ひの鬼やんま  
成年や赤紙の来ぬ敗戦日

さいたま 川村 治

土用波残せしごみにハンゲル語  
鯛をトレモロと聞くひとり旅  
枝豆の筈に我が家の歴史あり

青嵐客なきレース駿馬行く  
紫陽花のあふるる堤治水の碑  
山峡の茶屋のメニューに冷奴  
片陰を探し訪ぬる京の町  
夕端居母の姿を目の隅に

春日部 仲田 利子

鯛やコロナ禍の訃のなほ悲し  
舟底を洗ふ男ら風涼し

田中 泰子

ありし日の一家団欒西瓜食む  
牛の眼に優しく揺らく立葵  
片蔭に忍者潜むか築地堀

春日部 諏訪サヨ子

空きのなき駅のベンチや朝曇  
かなかなやスマホの蟬と相合はず  
遠雷やびくりと動く犬の耳

果樹園の実り称へむ秋の蟬  
終活の旅の切符は花野ゆき

名なき橋川面に映し涼新た

草加 外村 紀子

コロナ禍の尽きぬ話や秋の夜  
終電に競ふ足音秋の夜

さいたま 山戸 美子

新蕎麦やつゆに会津の名水を  
書き終へぬ文もて余す夜半の秋  
潮の香や遙か街の灯星月夜  
星流る珊瑚の浜で願ひ事

実印を使ふ事減り休暇明け  
コロナ鬱口実効かずうすら寒  
夏休み孫にほぐさるコロナ鬱

さきたまの古墳まあるく飛蝗跳ぶ

さいたま 本橋 稀香

淡々と日々暮しをり酔芙蓉  
天に向け吼ゆるが如し赫カンナ

東京 畑宮 栄子

稲穂波見渡す古墳の高さかな  
もぎる手にずしりと重き梨の尻  
欄干のこの朱が好き赤蜻蛉  
せめぎ合ふ鯉の太さよ池の秋

空き民家背まで伸びたる鳳仙花  
虚言・妄言・失言百日紅  
葛かづら大手を振つてはびこりぬ



秋暑し二重橋から角櫓やぐら

安らかに過ぎし今宵の法師蟬

しなやかに編笠深き風の盆

夕闇の東京タワーに秋の雷

蛩狩闇に迷ひて分かれ道

踊り果て二人で帰る暗き道

突然の雨に崩れし踊の輪

からたちの棘に淋しき鴟の賛

遠く来て滝の落つるを眺めをり

滝の音離れてもなほ滝の音

秋暑し猫が天下の城下町

色褪せし店の貼紙秋簾

もう一度免許更新野分かな

手作りの句集とどくや今朝の秋

殺到するホテルの予約大颱風

山間の軒を染めたる吊し柿

老いの背を伸ばし干柿吊しけり

岩肌を赤く染めたるななかもと

カーブミラーの中に燃え立つ山紅葉

相席や一期一会の今年酒

さいたま 野村 美子

数歩後に消えてしまひし秋の虹  
口笛に呼応してくる虫の声

爽やかに赤白帽の合宿生

初尾花黄金色して誕生す

運動会精一杯の伸びをする

高原 和子

鴟啼くやウイズコロナの風重し  
広き田に農夫一人や鴟猛る

巣ごもりを強ひられし日々鴟の賛

指す手戻す手流れ流れて盆踊

崖下にひっそりたちぬ水引草

和歌山 高橋満耶子

密つくる信号前の片陰り  
人声のとぎれとぎれの花野道

花野道宙のリフトはテスト中

熊除けの鈴の鳴り来る夕花野

岩肌に遊ぶ鞍鹿夕花野

さいたま 篠崎 紀子

夏が果つるもコロナコロナが日常語  
夏果つや頑張り過ぎし日々数多

茶を入れて一人卓袱台秋簾

秋兆す厨の窓辺風やはし

日暮れ来て何処ともなくちちる鳴く

和歌山 葛城千世子

さいたま 山下ユリ子

東京 水落 守伊

河原 叔子

裏庭に今年も二羽の黒蜻蛉

秋爽や次々埋まる予定表

虫の音や和気藹々に太極拳

大花野夕暮列車駆け抜くる

秋夕焼心はれるや孫と会ひ

秋の夜や雨音ながく夢の中

青い空高く低くと秋茜

満月や絹の衣を纏ひけり

抱かれし笑みほころびぬ望の月

光環をするする引くや今日の月

### 十月号分

緑蔭に茶器を並べてカフェ気取る

夏祭上げ魚捧げしづしづと

頭上飛ぶ物干し竿の雨蛙

大正ロマンかもす器に蜜豆を

朝帰りしほむ夕顔背筋刺す

タイフーンあまた蹴ちらし通り過ぐ

栃の実のまろみて季節めぐり来ぬ

はたはたと必死の生よ秋の蝶

秘密もう忘却の果て星流る

宮代 関谷多美子

さいたま 福田 育子

梅澤 輝翠

さいたま 小山 敦子

よく聴けば鯛吾に語りをり

新盆に「只今」の声空耳か

爽やかに風の通るや越後富士

嵐去り月を隠すや罫雲

秋耕やまづ雑草と格闘す

おはぎ五つ母に供へて秋彼岸

りんだうは草姿端麗床に活け

病む夫に合はせ鏡で見せる月

蓑虫の鳴くを聞きたし庭の隅

秋夕焼舟で歌ひし流行歌

湾に立ち先人偲ぶ秋夕焼

秋夕焼家路を急ぐシルエツト

一人じめ秋夕映えの田舎道

コロナ禍や秋夕焼の美しく

蓑虫を凶鑑で見つけ子ははしやぐ

鴉ねぐらへ秋夕焼に吸ひこまれ

アルプスの肩にまどろむ夏の雲

夏至すぎて翅あるものが燈を恋ふる

この古刹山号知らねど大銀杏

文豪の屋敷豪華や沙羅の花

さいたま 池田 珪子

和歌山 嶋田 洋子

さいたま 遠西勢津子

川口 田村 福美

小川 藤間 友二

こぼれくる秋夕焼のセレナーデ  
秋夕焼山シルエットの旅の宿  
秋夕焼吸ひこまれゆく鳥の群  
秋夕焼錦織りなす佐渡の海

さいたま

山岸久美子

老犬と歩くもつらい残暑かな  
里に来て雑木林や鴟の声  
古き家ひとり暮しや秋刀魚焼く  
なつかしき一粒食べてなつめの実

鬼石 加藤ナヲ子

汲む水と手桶の匂秋彼岸

あの世への残高調べ秋彼岸

絶品の味噌ラーメンや秋暑し

まだ負けぬ西瓜の種の飛ばしつこ

鈴木 藻好

百五十年「澤の出流<sup>いずる</sup>」の新酒なり  
背を伸ばし銀河も近しリズム足  
艶歌聴き新酒で祝ふ日日の無事  
白じらと窓の向かうの天の川

さいたま 落合 和枝

無花果の心許無き甘さかな

無花果や夜明けの色を引き裂きて

棧敷席秋扇ひらりひらりとす

秋扇縁を断ちし人ありて

横山 礼子

夫宛にメモとみそ添へ新生姜  
初めての夫婦喧嘩や新生姜  
新松子連山背なに光りけり  
待たされていつもの店の女郎花

東京 飯室 夏江

芋嵐表裏分かるる会議かな

秋蝶はふはりと垣根越えにけり

二十歳の子囲み味はふ新酒かな

腹の虫ささやいてゐる秋の風

綿貫ひさの

秋扇三密避ける助け舟  
無花果や未来の孫にお取り寄せ  
無花果や生ハム食すローマ人  
蟋蟀や空き地みつけの得意技

さいたま 小駒さち子

錆び付いた肩のこはばり新生姜

空白み嵐の行方新松子

一升の酒もわづかに新生姜

神宿る一本松や新松子

緒方みさ子

心地よき風を纏ふや秋茜  
名月や夕餉が少し早まりぬ  
物干しで遊ぶがごとき蜻蛉かな  
名月を愛づること雲ゆき過ぎぬ

伊藤 保子

マスクしてめがねとピアス耳多忙  
両の手は折りのための聖夜かな  
折鶴が光をこのむ冬の朝  
胸に手にひかりのほひ干蒲団

虚栗をとこは仕事ありてこそ  
漉き鉄左利きなる処暑の店  
曼珠沙華紙に包みし茹で卵

気がつけば「夕焼け小焼け」秋の暮  
ゴトゴトと自動製氷秋扇  
近況の報告長く秋扇

鬼やんま二の足を踏む仔犬かな  
赤蜻蛉夕日の中に収まりぬ  
尾根高く民話の里の盆の月

名月や梢と雲が語り合ふ  
満月をじつと眺むる猫可愛い  
月明り網戸の先に波光る

イトインは老らくの恋天の川  
寝めそやす埒もないのに天の川  
いさぎよく肩がわらふよ新酒なり

所沢 関根 千恵

大阪 遠藤 人美

さいたま 樋口 元美

工藤 信子

春日部 増田 静司

さいたま 田中 タイ

俳句四季新人賞  
受賞記念作品20句  
浅川芳直  
曾根毅

✧巻頭三句  
柏原眠雨

渡辺誠一郎

上田日差子

西池冬扇

川村智香子

佐藤文子

✧俳句と短歌の10作競詠  
細谷暁々

大下一真

✧その時 俳句手帳  
藤本美和子

✧今月の筆  
間村俊一

大西朋

✧好評連載  
南伸坊

猫の俳句

筑紫磐井

俳壇鑑測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

神作研一

手のひらの江戸

——古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

二ノ宮一雄

緊急企画!

ステイホーム中につき、  
写真で一句詠んでみました。

特集  
俳句四季新人賞  
最終候補者競詠

俳句四季  
Haiku Shiki

2020年12月号

11月20日発売  
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/>

東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

# 十年目の今、東日本大震災句集 わたしの一句

宮城県俳句協会では、東日本大震災の犠牲者を祈り、明日への一步を刻む礎として、二〇一三年と二〇一六年に『東日本大震災句集 わたしの一句』を刊行することができました。

来年三月で東日本大震災より十年が経ちます。この節目を俳句の力で掬いあげ、震災を風化させることなく未来へ伝える一冊となればと思います。

## ●応募作品

大震災後十年を迎える今日までの自作一句から三句まで 既発表可 応募者は原則もれなく一句掲載します。

## ●応募方法

B5原稿用紙や便箋など一枚の用紙に左記内容を記入の上封書で応募ください。

①俳句三句以内

②大震災当時の居住地・市町村名(政令都市は市区名)

③氏名または俳号(ふりがな、現在の年齢)

④郵便番号、住所、電話番号

⑤句集の購入希望の有無を必ず明記(二冊以上の場合希望の冊数) ※二句以上応募された場合は会長及び事務局が選を行います。

●応募料 無料。ただし、句集は一冊(1,000円(送料共))で頒布

頒布希望者は、現金または定額小為替で、句とともに送付ください。お問合せ先をご覧ください。

▼E-mail:washinkoku@gmail.com

Writer:washinkoku

インターネットの応募フォームからの応募もできます。下記QRコードから。

●応募締切 令和二年十二月十五日(火)

●応募先 千九八九―三二一

宮城県亘理町北新町二十二の十三 坂下遊馬方

「東日本大震災句集」係

電話 〇九〇―二九八二―七三〇

主催 宮城県俳句協会



毎月25日発売  
定価1000円(税込)

# 俳句界

2020年 12月号

別冊 投稿俳句界  
一流選者14名!  
日本一充実の投句欄

対談  
**姜 信子** (作家)

私の一冊  
佐高信の甘口でコンニチハ!  
**徳田千鶴子**「馬酔木」

＊セレクション結社「卑弥呼」江副史湖  
**鈴木貞雄**

特別作品30句  
**山崎房子**

●総論『昭和俳句の魅力』今泉康弘  
●補遺『その他の俳人たち』栗林浩

大正・昭和生まれの俳人50人が、昭和に詠んだ句を紹介!

**今もひびく 昭和の名句** (後編)

石田波郷 渡邊白泉 中村苑子 和知喜八  
古澤太穂 齋藤玄 木下夕爾 田川飛旅子  
桂 信子 角川源義 皆川盤水 野見山朱鳥  
森 澄雄 佐藤鬼房 金子兜太 鈴木六林男  
澤木欣一 眞鍋呉夫 野澤節子 草間時彦  
津田清子 飯田龍太 三橋敏雄 飯島晴子  
成田千空 楠本憲吉 清崎敏郎 鷺多野菜波  
村越化石 高柳重信 八田木枯 波多野爽波  
赤尾兜子 岡井省二 藤田湘子 宇佐美魚目  
伊藤白潮 鮎山實 川崎展宏 福田甲子雄  
阿部完市 加藤郁平 原 裕 今井杏太郎  
折笠美秋 福永耕二 攝津幸彦 上田五千石  
田中裕明 住宅顕信

※一部変更の可能性があります。

お求めは ● 千169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

株式会社 **文學の森**

## 作品評

### 山本鬼之介

悠久の古墳を望む新松子 原田秀子

今年三月十日に、国の特別史跡に認定された埼玉県行田市の「埼玉（さきたま）古墳群」を想定した俳句であると思う。現在埼玉古墳公園内にある古墳群は、大形の前方後円墳八基と大形の円墳一基からなるが、昭和初期に干拓のために取り毀されるまでは、現在の大形古墳に付随して小さな古墳が沢山あったと言う。稲荷山古墳から出土した「金錯銘鉄剣」とも相俟って、まさに国内きつての大古墳群と言える。この古墳群は、五世紀後半から七世紀にかけて成立したと言われており、当時のこの地方の豪族たちのことや、大和との繋がりなど、大きく夢の広がる古墳群である。

さて、高みからその古墳群を俯瞰しているのは作者自身の心であり、身近にある初々しい青松笠にその思いを託し、千数百年の大昔にタイムスリップしたような気持ちに浸っているのではないかと思う。

夏の灯や島にひとつの診療所 日高道を

伊豆七島か瀬戸内の島か、それとも沖縄諸島の一つか。とにかく面積が狭く人口の少ない島の診療施設である。高度な診療科目は無いが、内科や外科など、ごく基本的な科はあるのだろう。都会に住む者には心細い存在だが、島の住人にとっては心強い施設である。医師と島人の一人一人が顔見知りであり、互いの信頼感で成り立っているのだろう。テレビドラマに登場するような質素な建物と個性的な医師の顔が見えてくる。診療所の玄関の常夜灯には火蛾が群がり、瀬戸の隙間から金蚕（かなぶん）が飛び込んでくる。俳句の材料が沢山詰まっているようだ。

秋の川友禅染に生宿る 野田静香

友禅染の産地別分類では、京友禅・加賀友禅・東京友禅・十日町友禅が挙げられると、今回勉強した。さて、本句の場合は何れに当たるかを考えてみて、加賀友禅が浮かび上がった。それは上五の「秋の川」が最大のヒントで、友禅染の工程で、余分な糊や染料を川の水で洗い落とす「友禅流し」に、今でも川を利用しているのが加賀友禅と識ったからである。京友禅の場合は、昔は鴨川など市内の川を利用していたが、水質汚染の問題によって、大分前から工場内の人口の川

で作業していると言う。金沢市内の浅野川に晒される色鮮やかな数条の布地は、清流を泳ぎ下る錦鯉のようで、行き合わせた観光客の眼を釘付けにすることであろう。

夕風や星一つ生む大花野 曲淵徹雄

日没間際の広大な花野。北海道の広野のような気がする。そういう場所だとすれば、日中でも人の姿はなく、ましてや、日没後ともなれば当然である。花野の中に光るのは、野生動物の眼か。大花野と空が一体となり、墨で塗りつぶしたような暗黒の中に、一つ目小僧の眼のような星が現れた。恰も夕風が招き入れたかのように。

さやけしや打首めいてにじり口 青木鶴城

躪り口とは、四畳半以下の茶室の入口の名称。小さな茶室を大きく見せるのが目的とかで、二尺二寸四方が標準らしい。筆者は潜った経験は無いものの、実物を見た感じではとても狭く、入るのを遠慮したい気持ちになった。躪り口から茶室に入ろうとする格好を、江戸時代の斬首刑の形に見立てたことに驚いたが、頷かざるを得ない。季語が皮肉っぽくも感じられるが、自句に対するせめてもの懺悔の気持ちも受け取れる。

手の皺の語る人生衣被 越田栄子

飯の菜にしても、また、酒の肴にしてもよい衣被である。皮を抓んで芋がきれいに飛び出す時の感触が実にいい。顔の皺と同様に、手の皺にはその人の過去が凝縮していると思う。その道の人が観れば、苦勞に耐えてきた手か、のほほんと生きてきた手かが解るらしい。皮を外した衣被をゆつくりと口に運ぶ皺の多い手が、幾十年の人生模様を語っている。実に味わい深い手である。

合の手の漏れくる宿や星月夜 村杉清吉

何処かの温泉宿の宴席で、民謡か演歌が歌われていて、同座の面々が手拍子や掛け声で座を盛り上げているのである。その音が隣接している旅館の人や、道を歩いている人に聞こえる。お互いに旅行気分で心が豊かになっているのでトラブルも無く、綺麗な星月夜の時間が過ぎてゆく。

病室の西日気遣ふ白衣かな 保坂翔太

西側に窓のある四人程度の相部屋病室であろうか。室内の位置によって、カーテンやブラインドがあっても西日がきつい。多分清楚な白衣の女性看護師であろう。看護学校を卒業して間のない若い看護師のような気もする。患者が独身男性であったなら恋が芽生え、結婚につながるかも知れない。

嘘つけぬ目の真鯛を朝市に 横山君夫

なかなか意味深い俳句である。真鯛の「嘘つけぬ目」とは、如何なる目であろうか。真鯛を人に置き替えると分かる気がする。濁りのない澄んだ黒い瞳の目である。即ち、鮮度の良い魚の特徴と合致する。海から揚がったばかりの真鯛が、漁港の朝市で売られている。早朝の散歩に出た作者が買い入れ、宿の板前に頼んで三枚下ろしにしてみらい、地酒の肴にしたのかも知れない。自分に照らし合わせて、ついそんなことまで想像してしまった。

歌麿の女ふくよか酔芙蓉 染谷正信

初秋の某日午後、書齋で喜多川歌麿の描いた浮世絵の美人画を観ている。巧みな筆致から生まれたふくよかな人物像は、何度観ても飽きることがない。目を休めて庭に転ずると、酔芙蓉が、その紅色を濃くしていた。

八月や錆びたバイクに油さす 渋谷きいち

「バイク」には、モーターバイクと自転車との二つの意味があるが、何れにしろこの句には、作者の実年齢を離れた若者気分が介在していると思う。少年時代に憧れた石原裕次郎の姿が今なお作者の脳裏に生きており、「錆びたナイフ」なら

ぬ「錆びたバイク」に結びついたのではなからうか。実際は、普段手入れを怠っているママチャリに憐憫の情が湧いてのことかと思うが、八月という氣怠い季節感が効果をなしている。

終電や乗換へ駅の天の川 加藤でん治

終電でしかも電車を乗り換えるとなると大変気忙しい。駅構内のホームを移動中の寸時に見上げた空の天の川。ほんの一瞬のことであろうが、かえって印象深く眼に焼き付いたのではなからうか。

夢も恋も深くしまひぬ秋扇 新 暦文

余程の思いが込められた扇なのであろう。開く度に切なさいっぱいの想いが還ってくる。もう開くのをやめようと思ってもまたつい開いてしまう心の弱さ。秋のひと夜、その扇と心ゆくまで時を過ごし、二度と開くまいと心に決めた。

彩満ちて陽ごと刈りとる稲刈ぞ 神田治江

真夏の太陽をいっぱい浴びて黒褐色に日焼けした少年のように、成熟して黄金色に輝いたはち切れんばかりの稲を刈り取ってゆく。「陽ごと刈りとる」のスケールの大きさと、とどめの助詞「ぞ」が実に効果なしている。



秋の蚊の必死にすぎる下駄の足 梅澤輝翠

秋の蚊は弱々しいが結構しぶとい。花火見物か盆踊で浴衣姿に下駄を履いているのだと思う。やっと餌にありついたらおもっているのか、振り払っても振り払っても足の甲に纏り付いている。その一途さに負けそうになったが遂に退治した。

蓑虫は風音知るや枝に揺れ 塩野久子

たまに蓑から顔を出して、木の枝にぶらさがった自分を揺らしているのは何者かと、辺りを見回して直ぐ引っ込めてしまふ蓑虫である。そして、何事も無かったように風の吹くままに身を任せている不思議な虫である。

点りてほつとするや隣家の秋灯 西幅公子

「向う三軒両隣」の言葉とその付き合い方が、時代と共に薄れてきた現代であるが、何となく隣家のことが気になる気持ちも理解できる。夕刻になっても暗い隣家に明かりが点いて、その家が生き返ったように見えたのだろう。掲句の気持がよく理解できる。

冷凍庫三年前の山椒の実 山崎郁子

電気冷蔵庫が進歩して、冷凍庫付きが当り前になった時代

の生活は、便利さの反面に無駄を抱えているようにも思える。食材を次々冷凍庫に容れてしまつてその内に忘れてしまう。料理に使うとして冷凍保存した三年も前の山椒の実が出てきた。香りは？味は？と、主婦の戸惑う顔が浮かんでくる。

欄干のこの朱が好き赤蜻蛉 本橋稀香

空中で翅だけ動かして留まっていたり、竹竿の先端に止まっている赤蜻蛉をよく見掛けるが、橋の欄干もびつたりである。欄干の朱を、己と同じ色だと認識しているのだろうか。

夕端居母の姿を目の隅に 仲田利子

縁側か縁台での端居で、現代では貴重な夏の風情である。寛いではいるが何故か落ち着かない。かつて母が座っていた場所が空いているからだ。母が居てこそその端居だと感じた。

片蔭に忍者潜むか築地塀 諏訪サヨ子

築地塀が作っている片蔭が実にいい。築地塀と同色の衣服の忍者を意識したことで、楽しく深みのある俳句になった。

終電に競ふ足音秋の夜 山戸美子

サラリーマンなら大方の人が経験している終電への切迫感。男だけではなく、女も混じつての駆け競べである。

# 水琴窟

(夏季競詠・十月号鑑賞)

池田雅夫

競ふごと呼応すること郭公啼く

石川理恵

予定通り進まぬ普請梅雨深し

山崎郁子

遠郭公沢の水引く外流し

笹本啓子

「普請」は、家屋を建てること。また、土木工事をいう。連日の雨つづきで作業が捗らない。空を睨んでは溜息をつくばかり。梅雨には「梅雨豪雨」「男梅雨」などの語があり、非常に激しい梅雨をいう。「梅雨深し」に落胆の大きさが。

山荘の目覚めは早し遠郭公

染谷正信

この夏の球児の行進幻に

本橋稀香

山荘の夜明けは静かですがすがしい。白々と夜が明ける頃、山鳩が啼き、鶯もいる。遠くでは郭公が啼いている。都会での普段の生活とは大ちがいで、自然の雄大さを満喫しているのだろう。さて、今日一日何して過ごそうかと算段している。

遠郭公農学生の日弁当

向井章子

群れなして進路は南鷹渡る

外村紀子

兼題が『郭公』であり、発想、視点が似かよった句があるのは当然のこと。が、「農学生」を登場させた句は他にない。「郭公」の心象から長閑な山村の風景を思いつく。「農学生」の未来へ向けた農業への励ましと受けとめた。

山村の奥の家は水道もままならない。湧き水や沢の水を利用して家まで引いてくる。その水を外の流し場としている。そこには、ナス、キュウリ、トマト、スイカなどの野菜を浮かべているにちがいない。素朴さに郷愁をさそわれる。

今年にはコロナの影響で、春の選抜大会、夏の甲子園大会が中止になってしまった。高校球児の多くは甲子園出場を目指し練習を重ねている。目標を失なった球児を慮っている。また、その観戦、応援を楽しみにしていたファンの落胆をも。

鷹の仲間、冬鳥として北方から渡来する種類も多いが、夏鳥の類は晩秋にかけて南方へ渡る。「刺羽(さしば)」は中形の鷹で、一日に数千羽が渡ることもある。「鷹柱」として伊良湖岬、佐多岬、宮古島などで見られ壮観である。

郭公や生家見守る大蟻 細井良子

久々に里帰りしたのだろうか。幼少の頃を懐しみ、いろいろ思い出している。静かな町に郭公の声がよくとおる。家の傍らには樺の大樹が大きく枝を張っている。いつまでも残っていてほしいという気持ち「生家見守る」に表われている。

尺蠖の吾が道を行く二進法 森 和子

「二進法」の措辞に魅せられた。尺蠖虫の這い方、進行は指で寸法をとるのに似ていて、伸び縮みをくり返す。まさに「二進法」。じっくりと観察している姿が見える。枝の先端まで行き着いたとき、その先を探り滑稽な仕草をする。

遠郭公 焚火の煙垂直に 山中いちい

「郭公」と「焚火」の因果関係は定かではないが、「焚火の煙垂直に」と詠んだところに穏やかな田園風景が想像できる。郭公の声が山に飴し、幾重にも重なってくる。風もない好日をのんびりと過ごしている充実感があふれている。

托卵の攻防哀れ閑古鳥 諏訪サヨ子

郭公の托卵はモズやホオジロなどの巣に卵を産み哺育させる。元の巢から卵を一つ落とし、卵の数を合わせる。生まれたヒナはエサを独占するために他の卵を皆落とすという。

虹立つや弁慶読みし勸進帳 綿貫ひさの

今回の夏季競詠で「勸進帳」を詠んだ句が多く見られた。その中で、この句に魅せられたのは、「虹立つや」の季語の選択にある。安宅の関でのくだりで、義経、弁慶の心情を思うと、虹の橋を渡ることができたら平泉まで行けるのにと。

郭公の風ざわめきて雲白し 木村るみ子

「郭公の風ざわめきて」の措辞がみごとである。そして、「雲白し」と言い切っている。一句一章のリズムの良さが一層、句を引き立てている。仮に「郭公や」と切れを入れると、ぎこちない響きになってしまう。雲に転ずる広がりもみごと。

郭公や夜明けの色を呼び起こす 小駒さち子

郭公は別名を「閑古鳥」、「呼子鳥」とも言う。あの澄んだ鳴き声は郷愁そのものであり、「夜明けを呼び起こす」に相応しい。その姿は滅多に見られない。それだけに豊かな自然が強調される。上五を「かつこ鳥」に変えてはいかがか。

対岸は戦のあとや郭公鳴く 伊藤愛子

「対岸の戦のあと」で思い浮かべるのが川中島。武田信玄と上杉謙信が闘った地である。古戦場を前にして、はるか昔に思いを馳せ、郭公の鳴く平和な現在を慈しんでいる。

鼓

笛

集

山中順子選



母の忌に小春賜はり三姉妹  
コロナ禍の籠るに惜しき小春かな  
新米の湯気もろとも卵かけ

森 和子

白芙蓉白寿手前の義母見舞ふ  
腹いっぱいみ空むさぼる秋の朝  
捨案山子への角取かどとれてハの字かな

安倍 弘夫

草紅葉空気の薄き秘境行く  
ドアのなきトイレに並ぶ今朝の秋  
ほほ赤きチベット族の子雪を掃く

田中 泰子

星月夜人工衛星紛れをり  
秋高し辺境に建つ異人館  
熱戦の棋譜見届けし秋扇

仲田 利子

卓飾る主菜とならむ零余子かな  
夜寒かな女はみんな腕枕  
惜しむ秋子は喜々と花を摘む

青木 鶴城

紫蘇の実の匂ふ厨に母の声  
天地の怒りと豊穰秋の蛇  
果てしなき議論の末の星月夜

阿部 幸代

補聴器のダイヤル合せ秋の声  
肌寒し家路を急ぐヒール音  
ひと粒を足して夫に栗ご飯

新 暦文

山小屋の窓に額を星月夜  
記念樹の金木犀や子ら偲ぶ  
おかはりの声競ひ合ふ今年米

西幅 公子

秋鯖や土蔵に眠る大漁旗  
老僧にレシビは要らぬ走り蕎麦  
稲架解くや風雲急に宰相辞す

松島 寛久

葉鶏頭芥子粒ほどの種を持ち  
敬老の日の静寂は殊の外  
武骨な手零余子ぼろりと取り零す

長井喜代子

潔し葉つば捨てたる柿の艶  
木守り柿茅葺き屋根の得て低し  
渋り切り柿の一句の出て来ない

水落 守伊

実篤の言葉噛みしめ柿二つ  
神無月世界にあれば山の神  
大戦のこれが未明か十二月

千坂 平通

ハロウインの魔女とはなれぬ杖歩き  
ハロウインやどの骸骨と連れ立たむ  
ハロウインの魔女と唱はむ大正琴

山岸 弘子

木陰行く赤子の顔に秋の蝶  
貨車迫るレールの上を秋の蝶  
秋渴き過ぎたる食に消化剤

武田 重子

朝寒や少し濃いめに味噌を溶き  
スリッパの左右違へてうそ寒し  
足の指また痺つてゐる夜寒かな

石川 理恵

小百合咲きとどく香や星を待つ  
白扇に成りし富士山冬の湖  
コスモスにじつと隠れて三毛の猫

新井 孝麿

そばの花白き風吹く山の里  
曼珠沙華土手覆ふ紅空の青  
秋寒や更地にありし古き家

森下美智枝

あぢさゐを天蓋にして大師像  
左見右見して感嘆や百合大輪  
くず湯呑み母を語りし曾孫たち

伊藤 愛子

打ち揃ひ柏手打てば木の実降る  
実をとりに見上ぐる空や柿紅葉  
待ちかねて雲を退けたし月見酒

村杉 清吉

☆ ☆

# 鼓笛集作品評

山中 順子

母の忌に小春賜はり三姉妹  
コロナ禍の籠るに惜しき小春かな

森 和子

小春の頃は正に春のような日和である。その母の忌日は三姉妹で思い出を楽しんでいる様子がよく分る。そして賜はりが何とも言えぬ静かなたずまいが想像できる。二句目もコロナで束縛されているのにも拘わらず小春を楽しんでいる三人いつまでも仲良く響き合っていて下さい。

草紅葉空気の薄き秘境行く  
ドアのなきトイレに並ぶ今朝の秋

田中泰子

どこへ旅をしたのか尋ねたいが、多分今ではないと思う。私も先に中国の旅をしたことがあるが、トイレの句は共感する。しかし雄大な大地の自然は日本では味わえない感動を素直に表現した句である。

長い間この鼓笛集を担当させて頂いて頂いておりましたが、今回を以て辞退させて頂くことになりました。  
熱心に読んで頂いた会員の皆様には感謝して御礼申し上げます。ありがとうございました。

順子

鼓笛集巻頭（十一月号）

私の好きな一句（自句自解）

保坂翔太

よみがへる父の故郷通草の実

ある日、近所の方から、田舎より送ってきたのでと通草の実をいただきました。

小学生の頃、父の実家に行ったとき、従兄弟に連れられて、通草を取り行ったことを思い出しました。蔓にぶら下がっている通草の実は、ぱっくりと口を開けており、透き通っていました。熟した実は、とても甘くて美味しく、幾つも取って食べました。

父の実家は、新潟県十日町市の山奥にある茅葺屋根の農家でした。もう遠い昔のことになってしまいました。

## 鼓笛集の書き方

- 俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。
- 二千字詰原稿用紙をお使い下さい

編集部

## 句集喝采

近藤 徹平

### ◆橋本 喜夫「潜伏期」

書肆アルス

著者略歴 昭和三十二年北海道霧多布生。同五十八年旭川医科大学卒、平成十年「雪華」入会、同十一年「銀化」入会、同十七年句集「白面」刊、同二十八年「雪華」主宰継承。

著者が師事した中原道夫「銀化」主宰は帯文に、著者の句に死が頻出するが、「医師として日常隣り合わせにある状態が死を受容する体質にした結果（略）形骸化された死を詩的に彫琢することで自分を鼓舞しているフシがある」と記す。

薔薇句ふいっも何かの潜伏期

蔓珠沙華疫病は海を渡りけり

ウイルスに亡骸はなし風邪寝する

短夜や運び出されてゆく臓器

第一句は句集の標題句で、例え無症状でも何かの潜伏期かと慎重に診察する名医の句。中原主宰が「笹鳴や雌伏それとも潜伏期 道夫」を本句集に寄せているが、句意は全く対照的だ。第二句、第三句は平成十八年の句だが、現在のコロナ禍を予言している。第四句は医師の日常を詠んだ句である。

わが死後に死すべきものに落し文

ホワイトアウト妻は今朝瞑りたる

第一句は著者より先には死なせぬと希った最愛の夫人に難病が発覚した時の痛恨の句。第二句は豪雪の朝猷身の治療の効なく五十歳早々に昇天された夫人を気丈に見送る句 合掌。

### ◆粉川伊賀「十五夜十三夜」

文學の森

著者略歴 昭和二十四年埼玉県久喜町生、同五十三年落合水尾主宰「浮野」入会、平成元年句集「南北」刊、平成三十一年句集「一庵」刊、俳人協会会員。

落合主宰は序で、高校教員をしていた頃句会の指導をしたが、著者はその句会に全部出席していたと記す。従って著者にとって落合主宰は高校生時代から俳句でも恩師なのである。本句集は恩師の指導に実直に従う生徒の如く、一日十句を実践し、師の話題も全て句材にしていると思えるのである。

大晴れの山の十五夜十三夜

大晴れの二月二日や秋子の忌

野も山も錦秋三十五年

秋晴れて浮野の明日を疑はず

水明の秋ひろやかに祝ひけり

第一句は句集の標題句だが、師の「かな女亡きあとの十五夜十三夜 水尾」の句を念頭に詠んだ句と思える。第二句は師が「水明」に長谷川秋子第二代主宰当時まで所属したのを聞き書きした句と思える。第三句は著者の所属する「浮野」設立三十五周年を寿ぐ句。第四句は「浮野」の更なる発展を願う句。第五句は「水明」へ送るエールの句と読み取りたい。

老楽の畑仕事やちゃんちゃんこ

老いて尚俳句がある限り飛躍を期する心意気と読み取った。



# 水明

マネキンを目白へ運び冬霞

鬼之介



▼ 昭和 47 年 5 月、「水明」500 号記念大会。マイクをもっているのが二代目主宰・長谷川秋子



▲ 昭和 41 年 6 月、長谷川かな女傘寿祝賀会。前列右から二人目が三笠宮崇仁殿下。三人目が長谷川かな女、四人目が長谷川秋子



▲ 平成 12 年 9 月、「水明」創刊 70 周年祝賀会。壇上は三代目主宰・星野紗一

昭和五年九月、女流俳人の草分けであった長谷川かな女が、「水明」を創刊した。以来凡そ四十年、彼の大戦の荒波を乗り越え、創刊地の旧浦和で俳句活動を続け、昭和四十四年九月、八十一歳の生涯を閉じた。昭和四十一年六月に催したかな女の傘寿祝賀会には、三笠宮崇仁殿下にご臨席いただく榮に浴した。二代目を嫁の長谷川秋子が継ぎ、三代目を星野紗一が継承した。



## 「水明」

昭和5年9月、長谷川かな女が旧・浦和市で創刊。

現主宰・山本鬼之介（五代目）



▲ 令和元年6月、「水明」全国大会。  
「水明」の弥栄を祈念して三本締め



▲ 令和元年6月、「水明」全国大会。  
壇上は五代目主宰・山本鬼之介

## 燕にも五代の家格蔵の町

鬼之介



▲ 令和元年10月、運営幹事による信州方面への記念旅行

平成三十年十一月、四代目主宰・星野光二の後を山本鬼之介が継ぎ、昨年六月、新主宰として最初の全国大会を、十月には運営幹事による信州方面の記念旅行を挙げる。今年九月に、「水明」創刊九十周年の節目を迎えたが、折悪しく初春から猛威を振るってきた疫病に阻まれて難航。延期していた全国大会を十一月九日に決行する運びとなり、会員一同、意欲を燃やしている。

（山本鬼之介 記）

龍胆忌

岡田春水

蝶生まれ苺の花に 止まりけり  
釣り上げしイトウや 春の夢の中  
初蝶に つまぞうきんを絞りけり  
春の田に 泥鰯を偲ぶこなみかな  
辛夷咲く匂いに 風のさそわれし  
染め残る所がいとし 古茶いる、  
天空へ照る葉ざくらになつて生き  
巻頭にみたび推されし 龍胆忌（かな女忌）

自句の背景

旧浦和市岸町の「かな女」を訪問したのは昭和三十七年一月であった。切り妻造りの玄関の戸を開けて「こんにちは」と言つて入ると、ホールの衝立の左側の廊下から急ぎ出て来られたのは「秋子」であった。「美唄の春水です」と告げると、小走りで引き返して「御母さん春水さんがお見えになりました」と言いながらお部屋へ通された。質素な感じのお着物で「かな女」は座られていて笑顔で迎えられた。二十六年六月「陽炎女」宅の二階で一度お話しさせて頂いていたので、お鰯まで御馳走にない程長居してしまつた。「水明」の創刊で「澤本知水（秋子の父）」は、粗末なる一本の傘を抱えて悠久の旅に立つと書かれたが、その傘であった。「かな女」の忌日が「龍胆忌」である拙句をみたび巻頭に推された「師」の句碑を守る！地の果てで…。

## 一 報 告

### 雪嶺運営基金受入御礼とご紹介

(令和二年七月二十日)

この度、『水明俳句会』主宰・山本鬼之介氏より、雪嶺俳句会宛に、金一封(五万円)のご寄贈がありました。誠に有り難く心より感謝申し上げます。

『水明』は雪嶺の師系に当たる結社で、雪嶺創刊主宰・横道秀川師も当初から所属、『水明』創刊主宰・長谷川かな女先生に師事しておりました。また、多くの雪嶺諸先輩も所属してご指導を仰いでおり、深い繋がりがあります。尚、戴きました金一封は、雪鬼主宰より岡田春水特別顧問を通し、美唄に於ける句碑補修及び管理の件に関し、その一助にと美唄市役所に基金としてお贈りさせて戴きました。

後日、美唄市役所の担当者より、雪鬼主宰のもとへお電話があり、その後、美唄市長から御礼状と領収書が届きました。

以上、会員の皆様にご報告致しますと共に、水明俳句会主宰よりの書信を次欄にご紹介させて頂きます。

(句碑補修に就いては、雪嶺三八〇号25頁をご覧ください)

《編集部》

## 書 信

謹啓 今年の梅雨は、まさに荒梅雨の名に相応しく、各地に甚大な災害をもたらしておりますが、御地は如何でございましょうか。

平素はご高誼に与り御礼申し上げます。

貴誌二〇二〇・No.三八〇に掲載されました「美唄の句碑について」を拝読し、大変感激いたしました。「水明」の祖である「長谷川かな女」と夫の「長谷川零余子」、そして、嘗てかな女の愛弟子であった「正岡陽炎女」氏の句碑の維持補修費として、貴会特別顧問の岡田春水氏が多額の寄付をなされた由、たいへん有難く思い、この記事と岡田春水氏の御作品を、水明七月号に掲載させていただきました。句碑の管理等につきまして、何から何まで御地の皆様にお願ひするばかりで申し訳なく思っております。

ここに、誠に些少ではございますが、感謝の気持をお贈りいたしますので、貴会の行事にお使いいただけます幸いです。

今後とも宜しくご交誼のほどお願ひし、ご挨拶とさせていただきます。

貴会のおますますのご発展と、会員皆様のご多幸を祈念いたしております。

令和二年七月二十日

敬白

水明俳句会

主宰 山本鬼之介

雪嶺俳句会

主宰 石本雪鬼 様

## 第4回 水明塾 を終えて

研修部 保坂 翔太

第四回水明塾は十月二十七日（火曜日）、浦和バルコ「浦和コミュニティセンター第十四集会室」にて開催されました。当日の参加者は、受講生が三十四名（うち初参加者十二名）、運営の常任幹事が六名、合計四十名でした。

新型コロナウイルス感染の終息の見通しがかからない中、その対応策として、全員の検温チェックを行い、密にならないように配慮をしつつ研修を開始。司会は五明昇事務局長が担当しました。

午前九時、星野和葉編集長の開会挨拶で始まりました。

### 講話と講義

主宰には「俳句における虚と実」と題して講話をしていただきました。網野月を氏には「季語に付く助詞、季語を導く助詞」と題して講義をしていただきました。それぞれ念入りなレジュメが準備されました。内容は「水明」一月号に掲載致します。ご参照下さい。

### 句会

兼題の季語は「草の花」、テーマは「音楽」とし、参加申込時に二句を事前に投句していただき、予め清記を済ませて当日に臨みました。互選三句の披講は保坂翔太が担当しました。

この句会では、意見を述べ合い、忌憚のない討議を行うために自分の句が読み上げられても、作者は名乗らないことにしました。ただし、討議の後に行われた主宰選においては、作者名を名乗っていただきました。

### 意見交換及び討議

境延昭研修部長が、進行を担当しました。作者名を伏せたまま、句の問題点を指摘仕合って、作句のレベルアップを図るといふ企画の期待通り、受講者同士の活発な意見交換と討議がなされました。

### 主宰の選と講評

主宰より特選、入選の二段階の選が行われ、特選の句ひとつ一つについて講評があり、選外の句についてもひとつ一つに丁寧な説明がありました。主宰の選と受講者の選に違いがあることが分り、大変参考になったことと思います。

### (特選)

野の花の一つひとつにある音色  
薄れたる仮名の道標草の花  
長き夜や酔へば自慢の武田節

日高道を  
斎藤みよ  
染谷正信

落人の裔に住む村草の花

駅ごとの発車メロディ秋の旅

東ねても何故か寂しき草の花

秋の宵締めは校歌となる宴

扁額の阿吽は草書草の花

秋雨やいつもの席で聴くシヨパン

草の花避けて三脚揚げをり

着陸や窓いつばいの草の花

(入選)

この場所は無二の場所なり草の花

草の花姉さんかぶりの母と居て

草の花佇ちどまらせる夜の精

秋澄むやチャペルに響くアベマリア

草の花摘みて手向ける道祖神

鎮魂碑風と戯れをる草の花

全力でいのちをつなぐ草の花

牛飼ひのヨーデル流れ草の花

青空をさすダンスの手運動会

金平糖をこぼしたやうな草の花

土色の器に命草の花

孫帰えりコップに一輪草の花

公園で幼子両手に草の花

秋時雨シヨパン流るる純喫茶

そここに風を遊ばせ草の花

脚光を浴びし功罪草の花

笹本啓子

杉浦理恵

本橋稀香

斎藤みよ

橋本京子

阿部幸代

岡田宣子

小駒さち子

越田栄子

鈴木和子

神田治江

諏訪サヨ子

森下美智枝

反町 修

篠崎紀子

保坂翔太

橋本京子

菅原真理

阿部幸代

増田静司

工藤信子

岡田宣子

曲淵徹雄

青木鶴城

夜会草ワルツの余韻明けしらむ

黄落やボサノバ流るる古書の街

踏まれてもなほ首もたげ草の花

庭中の草の花持て父母の下

バツハ聞く熱い紅茶や秋時雨

秋うらら口ずさむのは応援歌

秋初風心に湧くラフマニノフ

合唱も輪唱もあり虫の秋

ロドリゴのギターの調べ秋の空

草の花舗装の隙間埋めてをり

敬老の日長寿を祝うハーモニカ

そぞろ寒路上ライブに人疎ら

銀幕のバヴァロツテイに酔ふ秋夜

イヴ・モンタン頬杖つきつ秋思かな

母恋ひて牛乳瓶に草の花

大房の萩に隠れし草の花

満月やつい口ずさむ「うさぎ」の歌

モーツァルト聞きて葡萄は甘くなり

アコーディオン「ラパンアジル」の夜半の秋

風の盆音色哀しき胡弓かな

友の合唱つられて歌ふ秋の空

他人は他人己は己草の花

廃線のレールを覆ふ草の花

手をつなぎ歌声はずむ秋の夕暮

秋の草揺れて奏でるバイオリン

小山敦子

本橋稀香

山岸久美子

鈴木藻好

池田珪子

越田栄子

鈴木和子

神田治江

日高道を

諏訪サヨ子

篠塚正行

笹本啓子

青木鶴城

小山敦子

杉浦理恵

池田珪子

森下美智枝

仲田利子

反町 修

篠崎紀子

西幅公子

染谷正信

保坂翔太

福田育子

菅原真理

師に合はせ爪弾く三味の良夜かな  
信楽焼の鉢映えさすや草の花  
村人が寄り添い歌う新走り  
秋気澄む四国寺町巡礼歌  
三線に残る歌声九月尽

綿貫ひさの  
梅澤輝翠  
増田静司  
太田絹映  
曲淵徹雄

### 俳句に関する疑問質問

事前に質問が寄せられた事柄に対して、主宰をはじめ運営の常任幹事に回答をお願いしました。

問一、「付きすぎ」について

◇季語及び季語のイメージを説明するようなことはしない。そして、つきも離れもしないことである。つまり不即不離に徹することである。

問二、季重なりについて

①かな女をはじめ、大家の句には季重なりが多い。季語の主、従の見分け方は。

②作句上、季重なりが避けられぬ場合の注意点、技法は。

③季節が違う季重なり、特に鑑賞の場合に戸惑う。

◇季語の主と従は何を言いたいのかが理解できれば、どちらの季語に重みがあるか分る。そうすれば自ずと季語の主と従が理解できる。

◇季重なりがダメというわけではない。季重なりの句は主と従をはっきりさせ、自分が十分納得したうえで作る。

◇句を鑑賞する場合、昔は季語でなかったものが、現在季語として加えられているものがあることも念頭に置か

なければならぬ。

問三、水明会員として

句作のポイントとしてやってはダメなことは。

同人、季音同人の意味と役割は。

◇他人の句を自分のものとしなないこと。例えば他人の句に、故意に季語のみを変えらることなどは行つてはならない。このことを厳格に実行することである。自分のオリジナルの句を作ることである。

問四、写生が基本と言われるが、報告・説明の指摘を受けてしまう。

◇ただ写生するだけではなく、じっくり見て、見たものに「ひねり」を加えることが必要である。

問五、俳句の評価について今ひとつわからない。

①予定調和とはどういうことか。

②季語が動くとは。

③類句、類想とは。

◇例えば剣道の有段者は、打ち合いのとき初心者の隙が分るように、俳句においては表現された作者の感性によりこの句意は何か解るようになる、ということを予定調和という。また、俳人の句を多く勉強することにより、季語が動くことや類想類句が自ずと理解できるようになる。自分の初期の句と現在の句を比較することでも理解できるのではないかと思う。

時間となり、茂木和子総務部長の挨拶をもって閉会。

※塾の本質をふまえて原句のまま掲載しました。編集部

# 水明例会



## 第一例会（浦和）

茂木 境

和子 報  
延昭

向き変へて吾を値踏みの秋蜥蜴  
御簾ごしの衣擦れの音秋裕  
妻が妻らしくなりゆく秋裕  
モノクロのシネマ帰りの秋裕  
胸元の触れて乱るる秋裕  
秋裕母に似合ひの襷返し

稀 香  
治 子  
由紀子  
マスミ  
節 代  
和 子

秋裕手持無沙汰で立つてをり  
紅絹匂ふ母の形見の秋裕  
坂の町裾を氣にして秋裕  
秋裕うつし身包み悪女めく  
空に向き揚ぐる杯月見酒  
結び上ぐる髪のきりりと秋裕  
霧分けて忍びと紛ふ対向車  
秋裕いなせな若衆尻はしより

以上特選  
延昭  
由紀子  
はるみ  
節 代  
マスミ  
チアキ  
徹 平  
理 恵

以上特選

ナフタリン臭ふ形見の秋裕  
群なして向かう山から蜻蛉くる  
真向ひの主に進呈柿三個  
石室を出でて日向や秋晴るる  
差し向ひ汲む酒旨し月今宵  
秋裕せ茶箱の中に母在す  
箆筒より母の思ひ出秋裕  
秋裕仕立て直して孫關歩

稀 香  
治 子  
和 葉  
大場順子  
喜 恵  
光 子  
愛 子  
和 子

## 第二例会（東京本所）

山中みどり  
太田 絹映 報

乾坤を塔で結びて霧流る  
秋深し異郷茜に染まる頃  
秋うらら猫の尻尾のよく動く  
よその子と池覗き込む秋うらら  
子が帰る前におやつを秋うらら  
鱗粉のきら又きらつと秋の蝶  
青てふは露草の青見本帳

玲 子  
鶴 城  
昌 弘  
敏 江  
陽 子  
峰 雄  
いちい

## 第三例会（東京）

五明 昇 報  
曲淵 徹雄

陽に闇にただ赤を吐く曼珠沙華  
秋うららロイヤルブルーのセーターで  
練り返す昔の話秋うらら  
野仏にあめ玉三つ秋麗ら  
吾亦紅戻ることなき日のセピア  
秋うらら今日も然ましたる用事なし  
一人でも寂しくないワ秋うらら  
枯色の服着て秋の淡海路へ  
椎の実を奥歯で噛めば祖父の声  
秋うらら憂鬱なるは明日のこと  
玉入れや秋空に舞ふ赤と白  
スカイツリーあかり灯ればあたたかし  
限りなく蒼深くして星月夜  
秋空を映し群青の隅田川  
水まみれの水掛け地藏秋うらら

大場順子  
徹 雄  
萬 蝶  
理 恵  
昇  
以上特選  
由 美

いちい  
みどり  
絹映  
以上特選  
竺 仙  
峰 雄  
寿 恵  
昌 弘  
陽 子  
鶴 城  
敏 江  
禮 子  
玲 子  
みどり  
絹映

新田の案山子ひと際高く立て  
秋高し手繋ぎ拒否の三才児  
赤い実が一つ零れて秋深む  
恙なく米寿を越えて天高し  
秋高し河原に味噌や醤油の香  
秋高し熊除け鈴が行き違ふ  
踏切板一気に踏んで天高し  
空高し水上バスも上げ潮も  
秋霖や質屋の窓の嵌め殺し  
コスモスの沖駆け抜くる放れ駒

第四例会 (浦和)

境 石井

延昭 喜恵 報

初紅葉リュックに付けし鈴二つ  
安らぎし祖父母の訛り零余子飯  
古民家の梁の太さよ零余子飯  
老僧の法話かみしめ零余子飯  
山里や法話をめる零余子飯  
婚の荷へ一枚挿む初紅葉  
民宿の母さん達者むかご飯  
学食に手書きのメニューむかご飯  
暮れ際を熾のごとくに初紅葉  
むかご飯寡黙な夫の笑みを見て  
悪役の面を外してむかご飯  
零余子飯旨しと言ふは父ばかり

雅夫 喜久 祥絵 康世 萬蝶 理恵 大場順子 岡野順子 徹雄 昇

山ガール零余子を分けて別れけり  
城門に俣控ふる初紅葉  
会席の締めは唐津のむかご飯  
初もみぢ猪に仕掛くの鉄の畏  
大原の尼寺寂と初紅葉  
初紅葉古城に高き野面積  
庭滝に届く下枝の初紅葉  
青い目の田舎体験零余子飯  
秘境ツアー迎へる宴のむかご飯  
再会に潤む眼や初紅葉

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 報  
河野はるみ

生臭き空地を残し賜去りぬ  
賜鳴きてこの山路を司る  
賜哮て吊橋の揺れおさまらず  
雑踏にぼぼと灯りて愛の羽根  
枝先に日干し夜干しや賜の贅

でん治 光子 順子 延昭 玲子 昇 翔太 光弥 喜恵

関西例会 (大阪)  
森本 早苗 報  
長き夜や志ん生嘶ざつくざく  
整然と海向く埴輪秋夕焼  
生かされて猷体思ふ夜長かな  
寒村をつつむ白波蕎麦の花  
思ひ出の中の実家や貴船菊  
山越えの月を迎ふる檻の猪  
鱒雲うつる水面に投網打つ

陣列は古伊万里一個京夜長  
電算機の桁押し違ふ星月夜  
落人の里で椎茸作る人  
玉兎待つ芒と灘の生一本  
夜長酒戦鬨語り出す百歳  
石の上木の実落ちるや二段跳  
初雁の声こぼしゆく朝まだき  
草の絮一日二便の航空機  
田舎家を模す料亭に糸瓜垂る  
花心より指に止まれり秋の蝶  
銀輪の少女さやけき風と来る  
天高し地上そよぎて応へけり  
今朝の秋横断歩道を小走りに

以上特選 玲子 千枝子 さわゑ 早苗 和子 千津子 くら女 道子 洋子 智恵子 敦子 礼子 千世子



若松句会（京橋）

菊池ひろこ  
石田慶子 報

中指の露を親指拭ひけり

鑄造のベンチは露に立ち話

露けしや阿吽で歩む熊野古道

露むぐら門柱のみの地震の跡

露の袖触れ合ひたるも終なるや

露草に裾の重さや山渡り

露の宿近ごろ輪ゴムよく切れる

芋の露ふくらみ落下地に還る

空へ露放ちて雀翔び立ちぬ

列なしてトラック始動露時雨

人里に悔を残して猪去れり

茹で卵つると剥けて露の朝

末の世を逆さに映す露の玉

万歩計一万示し露の玉

一夜干しの並ぶ寒村露の玉

勤行の声高らかや露の庭

露の玉子らに天与の好奇心

背景にしりぞき露の石灯笼

——以上特選

月を 萬蝶 千春 佐江 鶴城 俊晴 慶子 佐江 倭子 萬蝶 千春 鶴城 ひろこ

☆ ☆

## 新春俳句大会のお知らせ

[日時] 2021年1月31日(日) 午前10時受付 12時開会

[会場] 浦和駅東口 浦和パルコ10階 第13集会室

[投句] 2句 当季雑詠「初」の付く新年の季語 締切11時

[参加費] 2,000円 (お茶・昼食付)

※コロナの時節柄、懇親会は行いません。

[申込] 参加費を添えて、1月14日(水)までに総務部宛

担当：行事部・第1例会

各地句会



新樹の会 (浦和)

鉄棒に無様をさらす秋日和  
柳散る場末の露地の占ひ師  
秋晴や富士を横切る新幹線  
秋晴の紺碧の海波静か  
別れ路や踊太鼓の音遠し  
好み別なる幼ともだち鳳仙花  
分岐点バス停遠し罌雲  
秋晴や遠廻りして山の道

はこべ句会 (浦和)

天高し走れ無冠の競走馬  
紅葉狩白炎上ぐる間歇泉  
計算のサイインコサイイン罌雲  
誕生日ほぐしほぐされずわい蟹  
水鏡秋の雲刺すメタセコイア  
桔梗咲く己が青さに耐へながら  
怪し火のやうな舌出す毒茸

京子 道修 平通 清吉 韶子 鶴城  
光敦 久子 愛子 和子 美代子 ざく子

標の会 (浦和)

唐辛子夕陽に映えて紅すだれ  
風生れてめらめら畑の唐辛子  
一瞬に静寂切り裂く添水かな  
鹿威し僧侶の影が通り過ぐ  
唐辛子武甲山は白く輝ききて  
鹿威し音に遊ぶや詩仙堂  
革命の王妃のポスター唐辛子  
光が丘俳句教室 (東京)

守伊 治子 富子 朋子 克之 裕之 千重子 彰二  
柿を誉め柿の蘊蓄聞く破目に  
水澄めり魚群回遊悠悠と  
家々に橋ある郷の水澄めり  
大根蒔くおでんふるふき切り干しに  
今日の色明日へ重ね薄もみぢ  
柿すだれさびしき村を煌々と

蛸の会 (浦和)

活草や出だしを止む飛び六方  
朝寒や郵便受けに鳥の糞  
言へたのは二番目のこと秋海棠  
朝寒や目覚まし音小さくす  
月の頃君と歩いて次の道  
そぞろ寒湯宿の灯点る頃  
年末ジャンボ外れる前の十億円

宣子 元美 礼子 さら子 鶴城 月を

山茶花 (浦和)

水煙を荘厳するや秋夕焼  
宇宙から地球に沈む秋夕焼  
とろろ汁家族で囲み父しるのぶ  
すり鉢を押へる手欲しとろろ汁  
秋夕焼なかなか減らぬコロナかな  
晴れつづきなほも待たるる秋夕焼  
秋夕日ストンと落ちる日本海  
黒々と富士巖然と秋夕焼

マシミ 美江子 泰子 清一 嶺一 光子 綾子  
肌寒し気まづさ残る二人かな  
雲の間に待ちて現る今日の月  
湯上りの肌の寒さに月明かり  
子報士の天気は外れ肌寒し

和歌山水明句会 (和歌山)

扉開ければ銀河へつづく山の宿  
賜日和魚板たたいて案内乞ふ  
故里に廃屋目立ち破芭蕉  
再就職の書類ととのへ窓の月  
レトロ車の終着駅は銀河かな  
無花果を皮まで食べる友のゐて  
満月と語りひ今日の一万歩  
飛ばば金色とまればただの飛蝗かな

和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 旭代

鶴川山百合句会 (鶴川)

少年に敗れ王座の秋扇

月光や鳥獸戯面を写し取る

月天心街のシグナル連綿と青

秋扇死の枕辺にそつと置く

湯上りの素顔である月の夜

思ひ出は深くたたまれ秋扇

葉のすき間月の視線の通り抜け

病室のランプ点滅月の夜

祇王祇女仏御前や秋扇

当節は飛沫も防ぐ秋扇

来し方をぼつりぼつりと秋扇

花衣の会 (浦和)

羽毛鶏頭方の炎を青空へ

菊横に梵妻さちと朱印押す

落人の里はしづまり菊日和

グランドゴルフ球打つ音も秋日和

弁慶の爪先までも菊飾る

菊供養老いも若さきもみくじ引き

さざぎサークル (浦和)

藁塚や鼻腔くすぐる陽の匂ひ

古里の名も無き山も粧ひけり

藁塚や点々として千枚田

青年がレデイに声を山粧ふ  
山粧ふ富士山に向ひて「アエイオウ」

クスクスと藁塚の中笑ひ声

見沼田に藁塚小さき影をおく

珊瑚の会 (浦和)

秋時雨傘待ちつつも歩き出す

秋時雨鼻緒の切れし日和下駄

秋しくれ夫へあんぱんクリームパン

色鳥や湖畔に立つは彼の二人

秋時雨地声の太き山男

観劇の軽き疲れや秋時雨

林立の帆柱過る秋時雨

秋時雨ぬれし地面のむらのあり

秋時雨我が身に揺るるかづら橋

兼六園の根上りの松秋時雨

色鳥采向かう三軒良き仲間

秋時雨やつと履けたよ赤い靴

たかな俳句会 (川口)

カザルスのチェロの音深し秋深し

晩秋やふつくら煮物の香る時

自転車の補助輪外し菊日和

立ち枯れて楚々と又咲く小菊かな

晩秋や庭の咲き殻結ぶあした

お茶室に入る朱の帯菊日和

和枝

喜代子

タイ

和子

史代

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

晩秋の陽たまりに立つ地蔵尊

晩秋や重み増したる気ぜはしき

菊乱舞住む人なくて石灯籠

晩秋の空突き上ぐる大櫛

晩秋の鐘山里の音となり

りんどう俳句会 (浦和)

讚美歌のボーイソプラノ秋の朝

石庭のほき目清し秋の朝

襦袢纏ひあめつち統ぶる案山子かな

見はるかす秩父連山遠案山子

亡き祖父の野良着纏ひて案山子立つ

思はずに二の腕さする秋の朝

捨てるには見目好かりけり案山子かな

秋暁やめざす山頂指呼の間

秋暁やめざす山頂指呼の間

秋暁やめざす山頂指呼の間

への字の角取れてハの字の捨案山子

幾度も労ふてより案山子抜く

秋暁や両頬叩きジョギングに

秋暁や厨にことり母の音

神戸大池句会 (神戸)

倒れ込む青き櫛や天高し

変り映えなきを良しとし秋深む

朝日影今が匂なり秋の山

小鳥来る青き出窓の異人館

妃実子

鶴城

真知子

水尾

静香

翔太

紀子

サヨ子

徹雄

典子

治子

寛治

利子

卓郎

弘夫

君夫

正信

順子

早苗

礼子

千津子

玲子

青葉の会 (浦和)

秋寒の夜や天頂の星仰ぐ  
秋寒や一氣に落つるブレーカー  
秋寒や更地にありし古き家  
秋寒しドーラン厚き村芝居  
自転車に纏ひ付く風秋寒し  
楽しみのコンサート待ついわし雲  
一碧の隠し事なき秋の空  
豊作に舞ふ巫女の笑み神楽殿

円卓の会 (浦和)

罽雲地上では市民マラソン  
たとえば優しさに触るる時星月夜  
五十鈴川の流れを揺蕩ふ竜田姫  
朝茜窓越しに渡る雁  
尻尾があれば振つてもみたい秋の蠅  
暁に酔ふ晩秋の寂寥

りそな俳句会 (浦和)

星月夜白波吹ゆる日本海  
今宵こそ想ひの丈を星月夜  
星月夜輝く星の演奏会  
命日やいの一箱に菊の酒  
肋めく螺旋階段星月夜  
細波に小舟一艘星月夜

美紗子 真理 美智枝 啓子 洋子 和子 輝翠  
道香 静太 翔太 輝翠 月を 鶴城  
道を 香を 太を 翠を 月を 城を

兵馬備眼目覚めよ星月夜  
舟で行く花嫁御寮菊日和  
マスマシ 建治郎

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

村芝居本家の婿がお富さん  
隣り合ふ寺と氏神小鳥来る  
助六の見得が決まらぬ村芝居  
捨案山子片目は草に濡れてをり  
夕暮れ俯く影も案山子かな  
濡事はまかせておけと村芝居  
小鳥来る絵鳥屋敷の格子窓  
昇

野菊の会 (与野)

通草の実帰りの雨のむらさきに  
曼珠沙華江戸の石垣見上ぐれば  
楽しくて百まで数ふ柿の天  
濃りんだう今鏡面の山上湖  
美代子

水明熊谷句会 (熊谷)

風に香を里に野菊の盛りなり  
大輪の菊や蘊蓄尽きぬ夕  
大菊を届けし兄の自慢顔  
菊の香や武蔵の国の野の羅漢  
身に入むや手擦れし母のコンパクト  
菊花展大臣賞の札光る  
栄子 徹平 正行 和子 秀子 燈女

菊覚めて無音の寺を彩れり  
思慕深き丹波の栗と文届く

水明大阪俳句会 (守口)

蒼天に豆柿万の灯を点す  
忌忌し秋の蚊養ふ跡三つ  
竿投げる濁れる運河カンナ燃ゆ  
金星の追ふに任せて今日の月  
天高し吾の指強く掴みし嬰  
野ばらの会 (浦和)

芽吹句会 (浦和)

東の間の棚引く天衣秋夕焼  
白浜を群青色に秋夕焼  
遙かなる黒き稜線秋夕焼  
明日伐る松の枝枝秋夕焼  
べんがらの朱際立たす秋夕焼  
思ひ出の想ひを燃やす秋夕焼  
一斉に外燈点きて椋鳥の宿

治江 茂子 治江 秀子 夏江 栄子 茂子 和子 治江 みき子  
ゆら女 洋子 智恵子 人美 敦子  
ひろこ 玲子 富子 千重子 道を

けやきの会 (東京)

秋高し老いて遠出は許されず  
街路樹の銀杏見上げるバス待つ間  
盛り上がる野外活動天高し

祥 由 康  
繪 美 世

ミモザの会 (横浜)

秋うらら移動図書館やってくる

数珠玉やふと現れし江戸の町  
数珠玉に思ひ出つなぎ母傘寿  
平城宮跡を過る近鉄秋うらら  
バギーにバグ連れにシエパード秋うらら

慶 由 知 萬 史 亜  
子 美 子 蝶 弥 代

数珠玉どつさり方丈さんちの子が仲間

唐臼のぎいーごつとん秋うらら  
老犬にお辞儀してゐる狗尾草  
数珠玉の黒を連ねる祖母の指

玲 栄 千  
子 子 春

雛の会 (浦和)

贅沢な一汁一菜早稲の飯  
もてなしは藻塩で握る今年米  
水加減今日より変へて新米研ぐ  
新米の直売試食の長い列

喜 佐 燈 喜  
恵 江 女 恵

贈られてきたる新米胸で受く  
新米を磨ぐやはらかき掌  
新米に両手を入れてふるさとの香  
ぎんなんのさみどり色とワインの香

喜 輝 喜 輝  
恵 翠 恵 翠

桜林句会 (大宮)

雪間より笹竜胆に陽の雫  
りんだうの瑠璃深めたる山日和  
新蕎麦や鱈背な男一啜り  
一輪のりんだう凍と竹刀置く

光 知 光  
子 子 子

水明鬼石句会 (鬼石)

秋雨やポストに文の落ちる音  
お茶の花けもの道めく犬の道  
坂道やどんぐりコロリ足元に  
小さき紅いまが盛りの萩の花

和 聡 ナヲ 洋  
子 子 子

俳句の手ほどき (山右榎)

山の端の夕日の疲れ秋惜しむ  
相伝の刀に刃毀れ蓼の花  
亡き人の蔵書に触るる暮の秋  
飄の笛愛しき日々の甦る

順 延 倭 佐 ます  
子 昭 子 江 美

漁火は海の銀座よ秋深む  
金秋の和食の膳の秘伝かな  
雲ちぎれちぎれて秋の深みゆく  
遠き世の祖父の自叙伝秋ともし  
霧の幕突いて跳び出すフォグランプ  
谷紅葉落武者いづく秘伝の湯  
秋晴や一リットルの深呼吸吸  
伝言板に先に行くぞと曼珠沙華

慶 水 義 水 徹 美  
子 尾 子 子 平 尾

里山に小町伝説花薄  
西陣の伝はる機の暮の秋  
菊人形姫の裾より着せ始む

忠 翔 美 美  
男 太 尾 尾

あゆみの会 (浦和)

入口の水車がことり走り蕎麦  
岸辺はふ小さき波の夜寒かな  
銀杏散るオーブンカフェのオーレ  
読書して背中より来る夜寒かな  
繕ひの縫針光る夜寒かな  
黒猫においておいででの夜寒かな

朋 和 圭 山 重 藻  
子 和 子 遊 子 好

水明小川句会 (小川)

夕されば木犀の香の深さかな  
野仏を包む芒や風あつむ  
新米の粘り一粒からみつく  
朝風に柿の葉散りて実のたわわ  
朝市で夕日色した柿を買ふ  
秋天へ唸りをあげるコンバイン

き 綾 暮 栄  
子 武 子 子 子

芙蓉句会 (浦和)

新米が炊けて二人の夕餉かな  
コロナ禍や告別も無く花野へと  
秋寒や別けても今朝のこぬか雨  
地言葉を連れてお出かけ今年米  
来る人の無き別荘や秋の暮

正 道 税 美  
子 子 子 仁 子

柿の木塾 (浦和)

しみじみと交はる友と新走  
旅そぞろ目指すは越の新走  
新酒供ふ酒で死したる父なれど  
通草裂け今日の烏のにぎにぎし  
どことなく噛みつきさうに通草爆ぜ  
通草の実触れて少年登校す  
くい呑みの一つ遺影に新走  
でこぼこの敷居の木目新走  
あけび蔓空もるとともに引き下ろす

櫻蔭句会 (浦和)

星月夜新空港に降りたてり  
山の端の残照蕎麦の花淡く  
星月夜思ひ出そつと小抽斗  
星月夜せせらぎも聞く露天風呂  
山小屋の窓に額を星月夜  
閉園の木馬目を拳ぐ星月夜  
つつましく身を寄せ合ひて蕎麦の花  
山里に我をむかへたりそばの花  
母の待つ家路に蕎麦の白い花

かわせみ句会 (浦和)

彼岸花この朱が好き飄飄と  
富士望む湯宿の膳に柿生酔

かつ子 光 節 俊 和 水 和 恵 和  
昇 弥 代 晴 葉 尾 子 子 子 子

お裾分け隣りも一人柿二つ  
父のゐて好物の柿鈴なりに  
曼珠沙華数多の中に白秘か  
古里の畔蹠した曼珠沙華  
札所への坂ならからに彼岸花  
亡夫を恋ふ苾苾より燃えし彼岸花  
青い空亡妻の笑顔におけさ柿  
代代の世の名月をおしなべて  
若狭水明会 (若狭)  
秋風や野はさまざまに色尽くす  
秋風や色を違へて三方五湖  
秋風や歌碑の「故郷」流れくる  
秋風や野良へ出たがる母を留む  
秋風や手薄になりし日記帳  
秋風をはらみ交通安全旗  
鷹渡る海しか知らぬ漁夫の上  
海に立つ伊根の舟屋や鷹渡る  
秋風や山間通ふ送迎者  
近々といふも沙汰なく秋の風  
水明松本句会 (松本)  
夕風やほろほろ染まる酔芙蓉  
空あをく峰々は早雪の来て  
自転車の練習しながら秋深し  
どこからか私を誘ふ金木犀  
小説を拾ひ読みして夜の長し

のぶ子 保子 友子 治郎 紀功 せいじ 育子 初花 和風 白鷺 保人 鼓 郁子 寛久 ことは 祥子 想子 恒子 陽子 マリス 玲子 寿子

# 水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)

時間：午後1時から午後5時

(火・木・土・日・祭日は休み)

(上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内をお願いします。)

# 令和3年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応募句	未発表作品：15句
締切	令和3年2月末日（発行所必着）
応募方法	水明12月号に応募用紙添付

## 第21回「俳句四季」全国俳句大会 俳句作品大募集

「俳句四季」では全国俳句大会を開催し、俳句作品を公募しています。力作をお待ちしています。

### ◆募集

二句一組（雑詠・未発表のもの）何組でも可

### ◆投句方法

「俳句四季」巻末の投句用紙または原稿用紙に  
作品・住所・氏名・電話番号を明記

### ◆投句料

一組につき一〇〇〇円（現金書留または小為替）

### ◆締切

二〇二二年二月一日（消印有効）

### ◆送り先

〒189-0013 東京都東村山市栄町二二二二二八  
東京四季出版「全国俳句大会」係  
電話 〇四二一三九九一二八〇

◆大賞 一名 賞状・記念品・副賞二〇万円

優秀賞 二名 賞状・記念品・副賞五万円

佳作 六名 賞状・記念品・副賞一万円

◆浅井慎平・齋藤慎爾・富士真奈美賞 各一名

◆予選発表「俳句四季」五月号

◆入選発表「俳句四季」七月号

◆授賞式 二〇二二年七月七日（予定）



風 声

○現代俳句十月号——「現代俳句年鑑二〇二〇」を読む欄  
 村田あを衣氏の感銘十句抄  
 鶴の舞羽の先の先まで愛  
 星野和葉

○現代俳句十月号——「現代俳句の風」欄

岡野順子  
 河原叔子  
 梅澤輝翠

夕さりの底紅に酔ふ七十路  
 近藤徹平

秋灯下キープボトルの千社札  
 永野史代

秋鯖をしめ魚河岸のをとこかな  
 町野広子

汁の実に豆腐油揚げやや寒し  
 宮崎チアキ

川幅は常の五倍ぞ秋出水  
 由良ゆら女

敗戦日征きて帰らずかの指輪  
 由良ゆら女

○饗焰(米田規子主宰)十月号——「一誌一句」欄  
 鬼之介

蠅や過去は謎めく尼法師  
 鬼之介

○草笛(太田士男代表)十月号——「受贈誌一詠」欄  
 鬼之介

蠅や過去は謎めく尼法師  
 鬼之介

○くじら(中尾公彦主宰)十月号——「受贈俳誌美術館」欄  
 鬼之介

年頃のかな女の写真秋の昼  
 鬼之介

○雪嶺(石本雪鬼主宰)十月号——「受贈誌五、六、七月号」欄  
 鬼之介

白藤に雅なるかな巫女の指  
 鬼之介

○太陽(柴田南海子主宰)十月号——「一誌一耀」欄  
 鬼之介

夕風や裏木戸あけて按摩さん  
 鬼之介

○鳩の子(柴田多鶴子主宰)十月号——「珠玉の一句」欄  
 鬼之介

水神の在す狭霧の姥淵  
 鬼之介

妙齢を過ぎて身につく藍浴衣  
 鬼之介

特集 ひとり吟行のすすめ

特集コラム わが家の冬構え

●巻頭作品10句

尾池和夫・角谷昌子・川井城子  
 清水和代・関森勝夫・田中貞雄  
 蜂谷一人・船越淑子

俳壇

12月号

11月14日発売  
 定価900円(税込)

巻頭エッセイ  
 津川絵理子

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句〔第Ⅱ期〕……山本一歩・田口紅子

思想としての虚子……中村雅樹

経・日本の樹木十二選……広渡敬雄

わが俳句道・わが金言……權 未知子

先人のことば……今瀬剛一

俳壇史エピソード……坂口昌弘

季語への供物……井上弘美

俳壇時評……堀田季何／俳壇月評……辻村麻乃

俳句と随想12か月

野中亮介・武藤紀子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03(3294)7068 振替00100-5-164430





## 後記

今年度の行事は創刊90周年の全国大会を最後に納めとなった。しかし、出席出来なかったことは返す返すも心残りであった。新型コロナナに一喜一憂させられ何とも落ち着かない年であったが、水明の全国大会ではコロナ感染者が出なくて本当に良かった。唯それぞれ受賞者の方達の祝賀の宴が出来なかつた事が残念でならない。コロナが下火になったら改めてお祝出来る楽しみに待ちたいと思う。私が後記を任されたのは前の行事部長吉田静二さんからであるからもう何年になるかな。毎月のテーマは何にするか考えるので苦しみながら楽しみの一つでもあった。「いつも読んでいるよ」と言われると責任に穴があったら入りたい時もあった。しかし、振り返ってみると私にとってははじめの稿になった。

感謝の筆をおきます。(順子)  
先日、植木屋さんに庭の手入れをお願いした。延び放題だった枝葉を切り落し樹木は樹木らしく花木は花木らしく、余分なものを剪り落した姿は美しく清々しい庭となった。不意に俳句の原点を見せられた様な気がした。  
「シンブル、イズ、ベスト」  
俳句をこう表現した作家がいた事を思い出した。確に。  
俳句は自然や人間の断面を切り取って作句する一行詩である。余分な事は語れない、それに季語を入れると云う制約があるので読者の想像力を強く刺激する生命力のある詩である。十七文字の中にその全てを詰め込むとは難し過ぎ。

乍らも自然の美しさを楽しんでゐる。(和子)  
令和二年も早くもか、漸くか、いつの間にか終る。今年二月頃から新型コロナナウイルス騒ぎが始まり、あれよあれよと今や第3波に入ろうとしている。早く良いワクチンの待たれるところである。世間では、いろいろな事が起こり、生活が変わってしまった。果して元に戻るのだろうか。  
以前から、子供は日の経つのが遅く感じ、逆に大人は早く感じると言われている。楽しい事など待っている時は遅く感じる。子供、大人、年代に限らず感じ方の大小多少の違いであろう。今年のような大変な年は、早く終ってほしいと思っているが、まだ一ヶ月残っている。こんな時は遅く感じる。人それぞれに感じ方が違うので、いらいらしても仕様が無い。  
今年が早く終って、コロナウイルスが収束し、オリンピック、パラリンピックが無事に出来る令和三年がくる事を願う。(和葉)

## 水明

令和二年十二月号  
通巻一〇八三号  
令和二年十二月一日発行

発行人 山 本 鬼 之 介

〒330-0073 さいたま市浦和区野町一七二一八  
電話 048-886-1600三

発行所 水 明 俳 句 会

〒330-0064 さいたま市浦和区野町四一〇二二  
電話 048-822-1474一

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)  
一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)  
一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇〇〇一五三三九三  
印刷所 中 央 美 版

水明集

三月号 十二月二十五日締切

都市又は府県名

氏名(併号)

最上部の罫から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。  
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。


住所

氏名

職業

年齢





# 季音抄

山本鬼之介

野菊一輪添へて紫紺の襖紗かな  
むかごめし里の暮色も炊きこみて  
雨粒や野菊は草に縋りつき  
草の花小さき瞽女の無縁塚  
海峡の紺青の空鳥渡る  
月の軸掛けて月夜を豊かにす  
山越えの月を迎ふる檻の猪  
伝書鳩ひかりを放ち霧の橋  
振れば鳴る妬心の色や唐辛子  
南北へすれちがふ雲秋うらら  
モノクロのシネマ帰りの秋裕  
生業の響き訝す秋の朝  
妻が妻らしくなりゆく秋裕  
秋深し洪鐘わたる嵯峨野路  
紫の雲路たづねて大花野  
瓢の笛愛しき日々の甦る  
抜け道へにぎる合鍵居待月  
人里に悔を残して熊眠る

境 延昭  
椎野美代子  
島津初花  
鈴木康世  
田寺玲子  
永野史代  
十倉和子  
小倉倭子  
柚木治子  
宇田白鷺  
丸山マシミ  
高島寛治  
松井由紀子  
井上玲子  
近藤徹平  
梅澤佐江  
正木萬蝶  
井口俊晴

次の原稿を募ります。随時発行  
所宛、ふるってお寄せください。  
なお掲載については、編集部にお  
任せねがいます。

## ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽  
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月  
を付す)

## ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起  
きた面白い話題、めずらしい経験  
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

## ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本鬼之介

悠久の古墳を望む新松子  
 夏の灯や島にひとつの診療所  
 秋の川友禅染に生宿る  
 夕風や星一つ生む大花野  
 さやけしや打首めいてにじり口  
 手の皺の語る人生衣被  
 合の手の漏れくる宿や星月夜  
 病室の西日気遣ふ白衣かな  
 嘘つけぬ目の真鱗を朝市に  
 歌麿の女ふくよか酔芙蓉  
 八月や錆びたバイクに油さす  
 終電や乗換へ駅の天の川  
 夢も恋も深くしまひぬ秋扇  
 彩満ちて陽ごと刈りとる稲刈ぞ  
 秋の蚊の必死にすがる下駄の足  
 蓑虫は風音知るや枝に揺れ  
 点りてほつとするや隣家の秋灯  
 冷凍庫三年前の山椒の実

原田秀子  
 日高道を  
 野田静香  
 曲淵徹雄  
 青木鶴城  
 越田栄子  
 村杉清吉  
 保坂翔太  
 横山君夫  
 染谷正信  
 渋谷きいち  
 加藤でん治  
 新 曆文  
 神田治江  
 梅澤輝翠  
 塩野久子  
 西幅公子  
 山崎郁子

句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境 延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中美どり 太田 絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアル	山本鬼之介	五明 昇 曲淵 徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境 延昭 石 井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水 明 発 行 所	山本鬼之介	梅澤 江 河野 はるみ
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋 勉代	森本 早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水 明 発 行 所	山中 順子	西山 貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京 橋 区 民 館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石 田 慶子

## 水明例会案内